HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大学教育の再構築 : 五感を活かし手で考える
Author(s)	米山, 喜久治
Citation	經濟學研究, 65(2), 33-62
Issue Date	2015-12-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/60367
Type	bulletin (article)
File Information	ES_65(2)_033-062.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

経済学研究 65−2
北海道大学 2015.12

大学教育の再構築
――五感を活かし手で考える――

米　山　喜久治

1．はじめに

現代日本の大学は，「大衆化」，「世俗化」が進み「情報化」と「知識の断片化」の海に漂流しつつある。戦後声高に唱えられ続けてきた「国際化」は，近年漠然としたカタカナ用語「グローバル化」と名称を変えている。しかし「言葉」先行で研究・教育に未だ見るべき具体的成果を上げていない。2011年3月11日の東日本大震災と東電福島第1原発メルトダウン大事故は，バブル経済崩壊後の閉塞感に覆われた日本社会に痛打を与え，あらゆる社会システムが根底から大きく揺らいでいる。

戦後の復興と経済成長を実現した科学技術は「理性」に基づくものであり，破滅に導いた狂信的軍国主義とは対極にあるものと受け止められた。自然科学は，人間の世俗的利害を離れて「真理」を探究する学問である。国民は，その具体化である科学技術を平和と発展を実現するものとして「信頼」したのである。こうした日本人の心情の上に築かれた原子力発電の「安全神話」は，たとえそれが虚構であったとしても人々に浸透していった。

国民は1970年代水俣病（有機水銀中毒）を初め四大公害の激発で科学技術は，企業の利益追求に服従するものであるとの疑惑を抱いたのであった。しかしその後の積極的な公害防止技術の開発と設備投資によって局地的激発型公害は克服されたのである。これによって日本企業は，オイルショックを越えて成長を続ける事が出来た。この成功によって国民は，科学技術への疑念を忘れ去り，高度経済成長期の生活スタイルを基本的に変更することはなかったのである。

日本は1973年の第1次オイルショック時，産業化において明治維新以来の悲願であった欧米先進諸国へのキャッチ・アップを製造業を筆頭にして既に達成していた。20世紀初頭アメリカで確立された「大量採掘⇒大量生産⇒大量流通⇒大量消費⇒大量廃棄」これらを連結する「マスコミュニケーション」の産業システムが，全面的に導入されて高度経済成長が実現された。敗戦後の飢えと貧困に苦しんだ日本人は，衣食住の基本的ニーズの充足に始まり耐久消費財3Cとそれに続く新3Cを購入して物的に豊かな生活に人生の希望を見出したのであった。

しかしこの物的に豊かな生活は，大量の物資とエネルギーの消費の上に成立するものであり，必然的にマイナスの副作用である「環境汚染」，「環境破壊」を伴うものであった。公害の激発を見る事はなく，一方緩やかに地球規模の大気汚染，海洋汚染，温暖化，集中豪雨，強風，干ばつなど進み時間を経て一挙に難問として出現するに至ったのである。

また福島第1原発メルトダウン大事故によって人間の五感を超えた放射能の安全性を説く「原子力発電の安全神話」は打ち砕かれた。高度に専門化，細分化した人文・社会科学の研究は，部分の分析に集中して問題の全体像の把握と本質の追求を回避する傾向を強めてきた。これが期せずして側面からこの「安全神話」の形

成に加担することになった。「ことば」への信頼が失われて「ことば」を基盤に成立する人文・社会科学は，学校という制度内の「教育」ばかりでなく広く一般市民に伝える力を失ってしまったのである[1)]。

現代の日本を含む先進工業国は，近代科学技術文明の行き詰まりに直面し，深い危機の中にあるといわなければならない。

「大学は世界に開かれた公共空間である。人類の知的遺産を継承し，新しい価値を創造する組織である」という原点に立ち返って新しい理念，方法，具体策を構想して社会に貢献する社会的責任を負っている。そのためには明治以来続けられてきた後進国型キャッチ・アップ思考と既成概念から脱却しなければならない。眼前に山積する諸問題の解決には，まず個々の問題の出来るだけ歪の小さな全体像を把握する必要がある。そのためには「理論」や「既成概念」から思考をスタートさせるのではなく現場の「具体的事実」や「経験」から思考をスタートする「野外科学」,「現場の科学」のパラダイムを導入が不可欠である[2)]。諸問題は相互に影響を与え，関連しながらその変化の速度を増している。地球は環境再生可能の臨界点に近付いており,「時間」がいよいよ厳しい絶対的制約条件となって立ち現われている。

「事実」の確認からスタートして，問題解決の着地点となる「現場」を指向する研究・教育体制の構築が不可欠である。大学教育が未来に生きる若い人々を育成することは，日本人，広くは人類の未来の可能性を拓く事を意味している。

1）米山喜久治（2011）「情報の前にある現場の経験」『日本労務学会第41回全国大会研究報告論集』色もにおいもある生きた世界を五感・直観により身体感覚で全体として受け止めて，自らも地球をおおう命の連鎖の1つであることを感得しうる学問の方法論として「野外学」（Fieldology）を，構想している。

2）川喜田二郎（1973）『野外科学の方法』中公新書。

2．2003年度「企業論」講義

（ｉ）概要

筆者は北海道大学経済学部2003年度学部講義科目「企業論」（半年間28回，最大受講者数212名）を担当した。本講義では標準的知識を解説して学生が企業を抽象的概念で理解することを促進する伝統的スタイルを採用しなかった。期間中7回7名のゲストスピーカーを招聘した。企業の現場で活躍する当事者から直接話を聞いて，そこに存在する「問題」は何かを考える訓練を目的とした。

DVD映像活用による企業調査インタビューの練習では，ロールプレイング法を援用した。文章で書かれた事例研究としては本田宗一郎のエッセイ「心の修理業」の読後感想文作成を課題とした。学生が自分で作成した素材をもとに現代企業のリアルな像を形成することを促した。単に言葉で客観的に「対象」を認識し理解するだけでは，主体的な問題解決に向けた行動が生まれてこない。そこには「我がこととして受け止める」切実感が必要である。

講義の進め方の概要は，**図1**に示すとおりである[3)]。2003年度「企業論」講義の目標は，以下のように設定された。すなわち

「高度産業社会の構成単位である“企業”には消費者，従業員，投資家，ビジネスパートナー，地域住民，NPOメンバー，研究者，その他政治，文化活動等の多様な立場からの関与が可能である。大学に学ぶ学生としては，消費者，アルバイトによる従業員，将来の雇用関係などの立場からの関与が可能である。

最も重要なのは，学習と研究を通しての関与である。

3）米山喜久治（2006）「事例研究と等価変換」『日本労務学会第36回全国大会研究報告論集』，同（2007）「大学教育と現場の科学」『經濟學研究』（北海道大学）Vol.56.No.4。

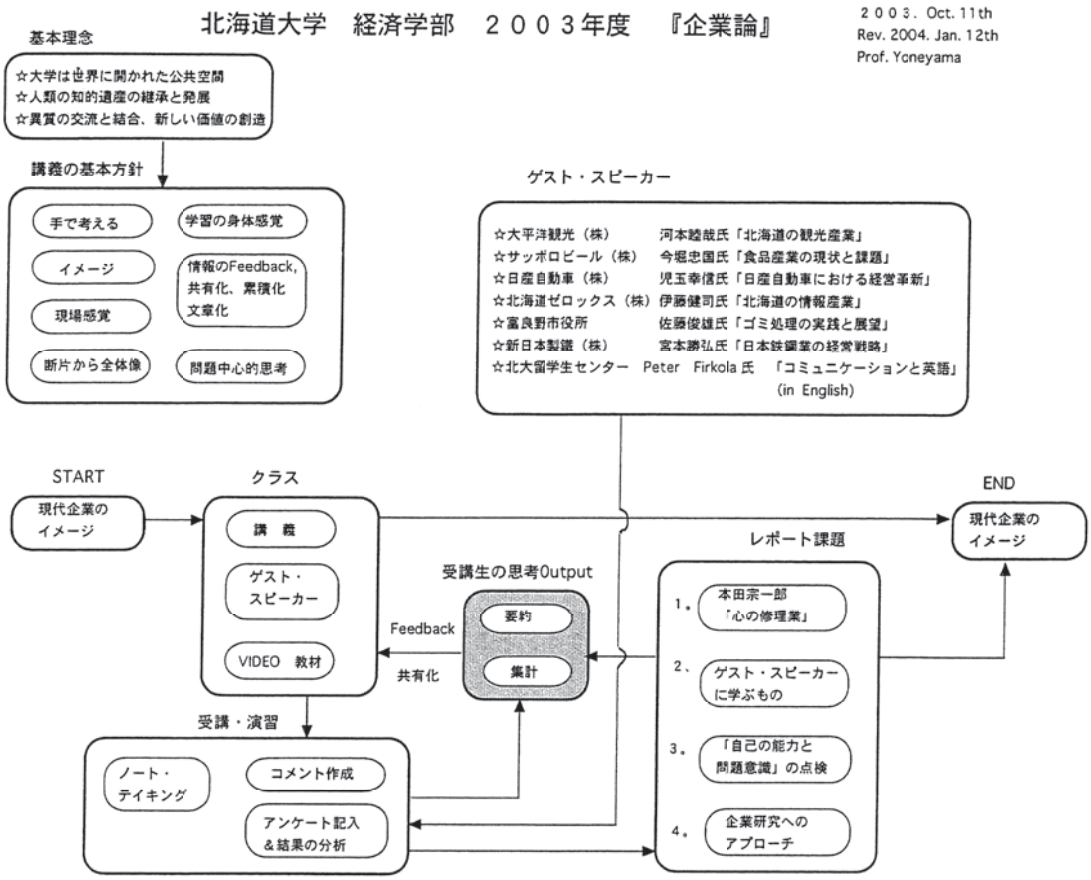


図１

抽象化された文字や数値を通して企業を認識するのではなく，自己の身体感覚をもとに生きた，大企業の全体像を把握することが必要である。

将来の職業生活を切り開くためには，「能力開発自己責任」の原則を自覚して職業観の確立が求められている。本講義は「論」を離れて自らが生きていく中でどのように企業に関与するのかを“手で考える”。」

「この講義科目では，民間企業，地方自治体等から斜めのゲストスピーカーを招聘した。激変する経営環境と先端的な経営実践を中心にして講演をしていただいた。講義の運営原則は“異質の交流”，情報のフィードバック，共有化，累積化を行い，各自が生きた企業イメージを形成し全体像を描くことにある。大教室において講師と学生がたとえ１対 200 であっても真摯に耳を傾け，内容の要点と自分が考えついたことをその場で記録，ノートテイキングすることは，授業に主体的に参加することを意味している。五感と直感を働かせて手をフルに活用して考えることは，今ここにいて講師の話を聞いて考えている自分を感じることである。記録を取りそれをまとめて自分の意見を文章で表現することは“現場で考える”，“学習の身体感覚”の回復を可能にする。受動的な標準的知識の半旗とは次元を違えて，自己の考えを表現するためのＯJT を意味している。

大教室の多人数の中での質疑応答には，勇気を

必要とされるが，ゲストスピーカーからは質問がおおいに歓迎された。

毎回講義終了後50字程度のコメント（要約）を提出。さらに2日以内に「考察」レポート（400－500字程度）の提出を課題とした。コメントは集計，印刷しフィードバックして学生間の共有化を行った。ゲストスピーカーにもこれをフィードバックしてご返事をいただけたゲストスピーカーのコメントも印刷して学生にフィードバックした。学期末には自らが提出したすべてのコメント及びレポートの内容を構造図解に展開することを課題とした。この講義全体から自分は何を学んだのかを明確にして，自分が持ちたい将来そこに主体的にコミットする企業のリアルな像の形成を目指した。」

学生にとっては卒業後の職業選択は，これからの人生における最も切実で重要な課題のひとつである。しかし講義で「組織」や「管理」などについての知識を得ても直接企業の現場に触れて具体的イメージを形成していなければ，それらを自らの職業選択（問題解決）行動に結び付けることは困難であるといえよう。認識と行動の間に存在する大きなギャップを埋めるものは，理性や論理ではなく生きたイメージであろう。伝統的な大学教育は「講義」を通して論理的体系的な「知識」の伝達が中心である。しかしこれと等しく重要なのが，テーマに関して生きたイメージの形成を促すことではないか。たとえ大学の講義で「問題解決」という概念を学習してもこれを自己の大学生活や日常生活に活用できなければ無意味である。単に試験に合格して「単位」を取得するための空虚な「知識」であれば，具体的行動の指針とはなりえないからである。

学生には，現代企業が製造業をその典型として製品の生産，販売をする組織，システムとしてイメージされる傾向がある。組織やシステムは人間を離れたメタリックな機械的存在というべきものである。疎遠な対象であり，人間的情感（共感や共鳴）を抱くこともない。「組織」や「システム」に隠れて見えない企業現場では多くの人間が希望や失望，喜びや悲しみ，怒りなどを持って働いている。この生身の人間的存在が見えてこないのである。

「言葉」や「概念」からスタートして具体的事実に接近するのは，1つの演繹的思考」である。既成の「概念」というレッテルを新しい「事象」に張り付けて，その事象の本質を把握したとする思考様式に結び付いている。

逆に具体的な「事実」や「経験」からスタートして抽象的「概念」に至る道をたどるのは，理論構築にとっては不可欠の思考プロセスである。

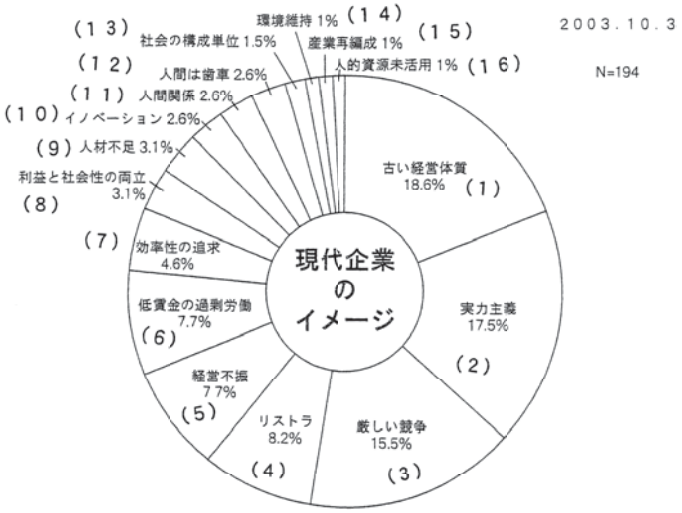
教科書に記載され講義で解説される「概念」の向こう側に現実の具体的世界が存在している。この認識は問題解決にとって必要不可欠な要素である。だが「情報化」がいよいよ「学校」を現実世界から遊離させており，健全な思考の阻害要因として深刻な影響を与えている。

現代の情報化社会の実態は，断片的情報の洪水である。日々その洪水の中にあって人は，ひとつの言葉「断片的情報」に接したとき，その言葉や断片的情報に対応する現実世界の具体的事例を探し出す感覚を失っている。言葉や情報とそれが指し示す「事象」との対応関係を検証する思考が働かないのである。

スマートフォーンなどの高性能携帯端末を利用してキーワードで検索し，その言葉や断片的情報の意味を理解しようとする傾向が強くなっている。

「言葉」に検索した「関連情報」を張り付けても現実世界の「事象」に接近することはできないのである。「言葉」をひとまず離れて現実の事象に立ち返り「一体何が起こっているのか」を自分の目で見て確かめて考えなければ，具体的問題解決行動には踏み出せないのである。

客観的認識を重視する思考は，混沌たる現実世界に関する「事象」とのやりとりを遮断す



現代企業のイメージ
図2

る。当事者意識を欠落させ「評論家的態度」をもたらすにすぎない。まず提起された課題（問題）に対して主体的にどのようにかかわるかを問うステップがあって，初めて問題解決をスタートさせることができる。

「企業論」講義科目では，講師（ゲストスピーカー）が，90分間語った内容を自分はどのように受け止めたのか？現代企業の現状と課題は何かを自分で考えることに力点が置かれた。各回の講義（講演）から当該企業と業界さらには広く日本の産業界が直面する諸問題の考察を目標とした。これは　インシデント・プロセス法を緩やかに適用した[4)]。

DVD映像，文献資料，アンケート調査結果資料等に対して毎回コメントを作成。これを集計してフィードバックした。

（個人⇔大集団）の情報フィードバックと共有化を通して「集団思考」の基盤形成を目指した。

期末には自分が作成したすべてのコメント，レポートを総合して「企業像」を描き，今後自分は「企業」にどのように関与アプローチするかを考えることを課題とした。

（ⅱ）　現代企業のイメージとその変化

講義スタート時点での「現代企業のイメージ」を，自由回答で書いてもらった。キーワードをピックアップしてグル―プ編成したものの分布は，**図2**に示すとおりである。企業は古い経営体質（18.6%）を持っており，「厳しい競争」（15.5%）に立たされて「経営不振」（7.7%）に直面している。このため「リストラ」（8.2%）を実施している。生産性向上は伸び悩んで従業員は，「低賃金と過剰労働」（7.7%）に悩まされている。他方，人事政策に「実力主義」（17.5%）を採用して「効率性を追求」（4.6%）し，さらには「イノベーション」（2.6%）を推進している。それは「利益と社会性の両立」（3.1%）を目指すものである。

このようなこれまでの生活とTV，新聞，雑誌等のマスコミで形成されたイメージが，受講後にどのように変化したのかを学生のコメントによって確認することが出来る。（**表1**）

4) Paul & Faith Pigors (1980)“The Pigors Incident Process of Case Study” (2nd ed.) Educational Technology Publications.

表1　2003年度　『企業論』受講学生の「現代企業のイメージ」変化

学生	第 1 回（10／3）イメージ	最終回（1／30）イメージ	自己点検・コメント
NR	完全失業率の高い現代において企業に入る事も企業で生きていくことも大変であると思う。	企業という世界では，自分を活かすも殺すも自分次第であるという印象を持った。	イメージが何かモヤモヤがかかったものから，それが取れた。
KH	環境に優しい事業を展開している企業が多いイメージ。省エネを第 1 に考えている企業が増えている。需要にあったものを供給している。	正しい現状を知り，未来を見据えて常に向上していく姿が，企業のあるべき姿である。	企業の理想の姿を自分で考えるようになった。
KM	企業は能力の高い人を求めているが，求める水準に達する人の絶対数が少ないので人手不足。	最低限のマナーを持ち，情熱と高い意識を持たなければ生き残れない。ある意味当然の状態にある。	ゲストスピーカーのお話で実社会の現状とそれに対する心構えを学んだ。
IK	規模は大きいが，内部がうまく機能しているとは思えない。	改革の必要性を感じて今までとは違った方向に動き出していると思う。	ゲストスピーカーの話でイメージが変わった。
AI	昔からある企業と今の時代に新しく出来た企業の差が，ものすごく出来ている。企業内の人間関係がスムーズにいく所は発展している。	企業は多くの人の集まりだが，1 人 1 人が生き生きと働いている企業は成長すると思った。それは人の心の持ちようだろう。	自分が主体となり企業との関係を客観的に見れる。
TS	現代企業は，利潤追求を重視し，職場の環境などは，軽視しているというイメージ。	企業に対しては学生気分では，歯が立たない。厳しい世界だというイメージを持った。	コミュニケーション能力が，重要であることを学んだ。
MT	ムダを省いて効率化を推進している。システム化している。	常に発展のために努力をしている。社員 1 人 1 人が，考えながら仕事をしなければならない。創造力が，重視されている。	現場のナマの声を聞く事によってイメージが，変わった。
TH	人間が生活を営む上で絶対になくてはならないもの。企業がなければ現代社会は成立しないと思う。	不況下の日本でも自らがなすべき課題に取り組み，目標を達成している企業が多数存在していることを確認した企業は社会に貢献している存在であると強く思う。	企業内の様々な人間の活動に注目しなければならない。
FT	現在のところ企業は，非常に謎が多い。企業とは一体どのように構成されているのか解らない。	自己変革を行っている企業。自己変革を常に意識している人材が多い企業が発展している。	この半年でものの考え方が，大きく変わった。
MH	同業他社との厳しい競争の中にあり，利益追求の弱肉強食の世界。	現在の社会体制の中では常に創意工夫を行い，社会や人類の発展に貢献する中心的な存在。	企業に対してより具体的なイメージを持つ事が出来た。
KH	融通の効かない縦社会。堕落している。	暗い日本経済の中でも常に向上心を持ち，もがきながら前を向いて一歩ずつ歩いている。	在学中に社会に必要とされる能力を身につける。
TK	不況の中現代企業は，会社をよりよいものにするために優れた人材を必要としている。	社員 1 人 1 人が業績を上げようと切磋琢磨している戦場のようなイメージ	企業における経営者の重要性を認識できた。
SR	生き残るために必死になっている。いらないものは，切り捨てる。新たなものを創りださなければならない状況にある。	日々進化している有機体，主体性を持って積極的な行動を起こせる人材が求められている。	企業のイメージが，無機質で冷たい存在から幾分ポジティブに変化した。
YU	長引く不況に苦しみ国際競争に取り残されている。	生き残るためにそれぞれが，独自の方法で差別化を図り，たたかっている。	自分の企業イメージが，前向きに状況を打破しようとしているものに変わった。
OK	能力主義，実力主義といわれるが，単なる業績主義に思える。	様々な戦略，人材育成，利潤追求を行い現代社会を必死で乗り切ろうとしている。	今まで企業というものが，具体的に見えていなかった。
SR	我々にサービス，製品を提供してくれている。今日では不況によりリストラなどマイナスのイメージが，大きい。	企業内部では，能力のある人間が様々な考えを持ち，活動している。現代社会で生き残るためにいろいろ活動している。	企業は顧客の好みに合わせて活動している。

最初の社会的風潮や既成概念に縛られた漠然とした「企業」イメージは，主としてゲストスピーカーから企業現場の生の声を聴くことによってより現実に具体的になったといえよう。「ゲストスピーカーの話によって，企業について知ることが出来た。そして自分が取り組んでいく課題が明確になったことは，大きな収穫でした」（2 年女子）の意見が示すように今後自分がどのようにお付き合いをするのか，そのための課題も考えるようになっている。抽象的概

念や理論ではなく企業現場の実態を直接知ることとは，具体的経験から思考をスタートさせるためには，重要なステップであることが明らかである。

（iii）「心の修理業」読後感想文の分析

「企業論」講義科目では，ゲストスピーカー講演に関して自己の考えをまとめるレポート作成。DVD 映像活用による企業インタビュー調査練習などその場の記録作成の訓練。講義中に行ったアンケート調査結果の分析等を行った。さらに１ケースの事例研究を加えることにした。これは学生に「企業研究」には多様なアプローチが，存在することを小さな課題を通して理解させる事を目的としている。

事例研究の中心は，専門的知識（概念や理論体系）を学習することではない。事例（他者の世界）を鏡にして己を映し出し，自らの経験と対比させてそこに共通する［本質］を同定すること。自らが直面する課題の解決に向けた構想と具体策のアイデアを得ること。既に歴史的に検証された事例（事実）を素材にして，こうした思考のフルコースを訓練することに意義がある[5]。

事例研究として本田宗一郎のエッセイ「心の修理業」（文庫本見開き２ページ）の読後感想文の作成を課題とした。この短い文章を読んで自由に自分の考えを述べるものである[6]。（本文800～1000 字程度，感想文の要約 50 字程度）

この課題は，日本の自動車メーカー本田技研工業（株）（ホンダ）の企業研究ではない。本田宗一郎（1906～1991）は，技術者でありホンダの創業者，経営者である。二輪車の製造からスタートして，1972 年マスキー法をクリアする CVCC エンジンの開発に成功。小型車生産で自動車産業の発展に一時代を画した人物である。大学の講義科目「企業論」において取り上げるにふさわしい人物である。個人史，企業史，技術史，産業史，社会史，文化史など多様な観点から多くの事を学べる日本人の１人である。

エッセイとは，随筆と呼ばれ自由な形式で書かれた思索性を持つ散文である。（広辞苑）学術論文は，テーマ，方法，研究対象を明確に設定してデータを分析，論理を展開して「結論」を得る事を目的に書かれた文章である。

このエッセイは，本田宗一郎が，若き日（1922～28）に東京の自動車修理工場「アート商会」で自動車修理工として働いた時の経験を基に自分の考えを語ったものである。これは厳密な概念と論理で組み立てられた論文ではなく，自らを語る「人生の物語」である。読者は筆者ナマの声に接することにより人柄と現場経験を知り，筆者の思索の原点となる「原体験」を理解することが可能である。さらに 21 世紀初頭に生きる若い世代の１人として筆者の「経験と思索」を「我が事として受け止めて」そこからヒントを得て，今後の学生生活に活かすことが可能である。

短いエッセイを課題にしたのは，学生が読むための時間的負担を小さくする事。読後感想文もＡ４版，１枚以内にしたのも書く負担を軽くするためである。

創造工学者市川亀久弥によって体系化された等価変換論を基礎にして分析枠組み「先人の経験と思索に学び，問題解決を実践する―等価変換思考と問題解決」（**図 3**）を作成して読後感想文の内容を分析した[7]。その結果は，学生集団の持つ思考の傾向性を示すものとなってい

5）湯川秀樹（1971）「同定の理論序説」『創造への飛躍』p.164～167　講談社文庫。

6）本田宗一郎（1985）「心の修理業」『私の手が語る』p.95～98　講談社文庫。

7）市川亀久弥（1970）『創造性の科学』日本放送出版協会。古典的にはレオナルド・ダ・ヴィンチの研究がそのパイオニア・ワークである。
杉浦明平訳（1954，1958）『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記』（上・下）岩波文庫。
ベルラント・ジル／山田慶兒訳（2005）『ルネサンスの工学者たち―レオナルド・ダ・ヴィンチの方法試論』以文社。

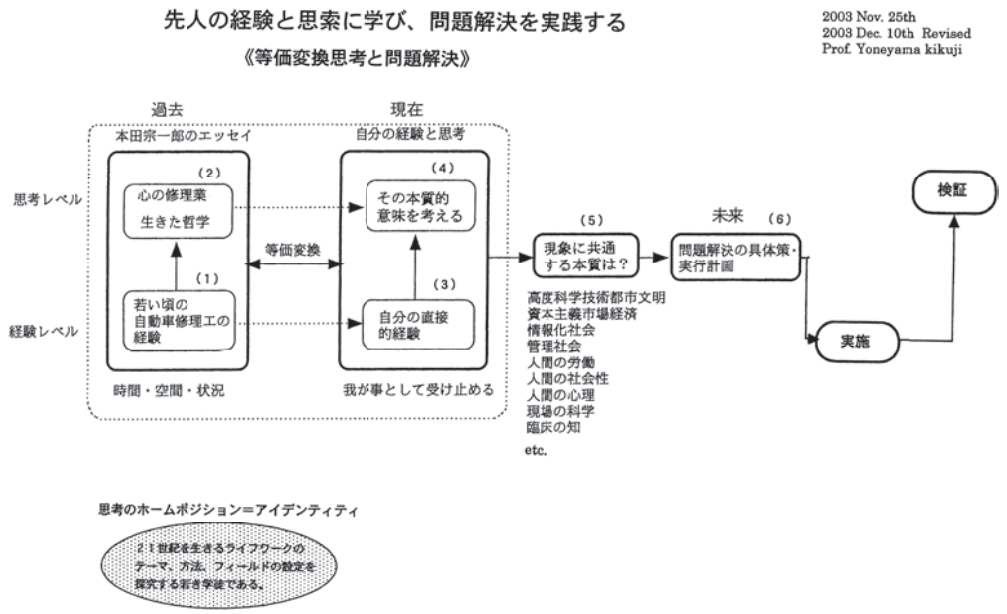


図 3

る。また単純な指標による計測値のグラフ化は，傾向を「見える化」(Visualization) するためである。このフィードバックされたデータと「読後感想文」によって学生個人は，集団的傾向と同時に自らの特徴も確認する事が出来る。学生は，読後感想文作成の課題達成という同一経験をしている。この「経験」と分析結果データの共有化は，スムーズな集団内コミュニケーションの基盤形成を意味している。教室内では，講師―学生の関係による個人レベルの学習と同時に集団レベルの学習（相互研鑽）が重要である。クラスメート間のコミュニケーションと相互研鑽の基盤には，同一経験と集団内の「情報共有化」が不可欠である。そして何よりも重要なのが，相互の信頼関係である。

2003 年度『企業論』(28 回) では，毎回学生が書いたコメント等を整理，集計，分析。その結果を印刷してフィードバックした。自己が作成した情報も含む「情報のフィードバック，共有化，累積化」によって学生個人及び集団レベルにおける学習を進展させようとしたのである。

経済学部 2 年生を中心に受講生 212 名（2 年生 192 名，3 年生 18 名，4 年生 2 名）の読後感想文は，エッセイを読んでその文意を理解する文章を書いた人が 152 名（71.7%）であった。圧倒的多数が，思考レベルに止まって「経験世界」にまで考えが及んでいない。あるテーマに関してその思考の根拠となる具体的経験や事実が提起される。その時，読者として自己の経験的事実を思い浮かべて対比させながら自己の考えを発展させることになっていない。小学，中学，高校以来の国語教育が影響。大学生には「国語」の大学入試問題への解答方式に慣れさせられたことも影響しているのであろう。

大学入学後 2 年生，3 年生の現在に至るまで通常の講義科目でレポート提出の機会も少なく，そこでは自分の考えを自由に述べる機会がなかった。さらには日常的に友人達との対話においても自分の意見を述べる機会が，ほとんどない。こうした事が複雑に絡み合って影響を与えているといえよう。大学の講義が，一方的な「知識」の伝達に終始して学生に自由に思考を発展させることを促すものでない。こうした小

中高校そして大学における教育が大きく影響を与えていると考えられる。

本田宗一郎の経験と思索と自己の経験を対比検討した人は，60名（28.3%）であった。その内容は，次の通りであった。（**図4**）

（1）経験したアルバイト
　男子18名，女子21名　計39名（65%）
（2）所有する自転車等の修理
　男子4名，女子1名　　計5名（8.3%）
（3）販売員等の接客態度
　男子3名，女子1名　　計5名（8.3%）
（4）その他の生活経験
　男子3名，女子2名　　計5名（8.3%）
（5）観察，調査事例
　男子1名，女子3名　　計4名（6.7%）

1922～28年まで東京で自動車修理工をしていた若き日の本田宗一郎の経験と思索の内容を21世紀初頭大学に学ぶ1人の若者である我が身（思考のホームポジション：21世紀を生きるライフワークのテーマ，方法，フィールドの設定を探究する若き学徒）に引き寄せて考えることは，問題発見のプロセスである。「本田宗一郎」と「自分」が経験した2つの「事例」の底に存在する本質を洞察して「同定」する。80年以上も前に1人の若い日本人が取り組んで発見した「本質」から時空と状況（場）を超えてヒントを得る事。21世紀初頭の同じく日本に生きる若い1人の日本人である自分が，人生において取り組むべき課題の解決にどのようにそれを活かすことが出来るのか。現在学生である自分の能力開発，将来の職業生活（いかに生きるべきか）に結びつけて構想を練り，具体策を考える。これが問題解決思考である[8]。

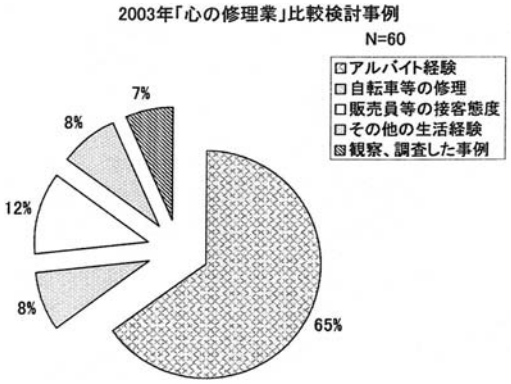


図4

3．2015年度「企業論」フィードバック講義

（i）現代企業のイメージ

2015年度「企業論」（岡田美弥子准教授担当）の時間にゲストスピーカーとして講義をする機会が与えられた。2015年5月に本田宗一郎のエッセイ「心の修理業」の読後感想文が寄せられた。6月23日の講義は，この読後感想文の分析結果をフィードバックする形式で行われた。全体の進め方は，**図5**に示す通りである。

読後感想文を提出してくれた学生は，64名であった。（**表2**）

「企業論」講義の一環として読後感想文の分

8）客観的認識を目的に抽象的概念，理論を教える社会科学例えば「経済学」，「経営学」は，学生の生活経験を直接取り上げることがない。このため学生は，現実感をもって「概念」を理解することは，困難である。「労働市場」，「熟練」という概念を聞いても「自己の能力開発のために学生生活をいかに送るべきか」，「卒業後に始まる職業生活」を貫いて「いかに生きるべきか」という切実な課題とは結びつかないのである。それはあくまでも個人の問題であり，講義時間に議論されることはない。これはその「専門家」が担当すべき領域とされる。キャリア・ガイダンスの専門家，「メンタルヘルス問題」には，カウンセラーが専門家として登場することとなる。
阿部謹也（1997）「生き方問わない経済学」『日本経済新聞』1997年10月22日号。
児美川孝一郎（2013）『キャリア教育のウソ』ちくまプリマー新書。
藤田晃之（2014）『キャリア教育基礎論』実業之日本社。

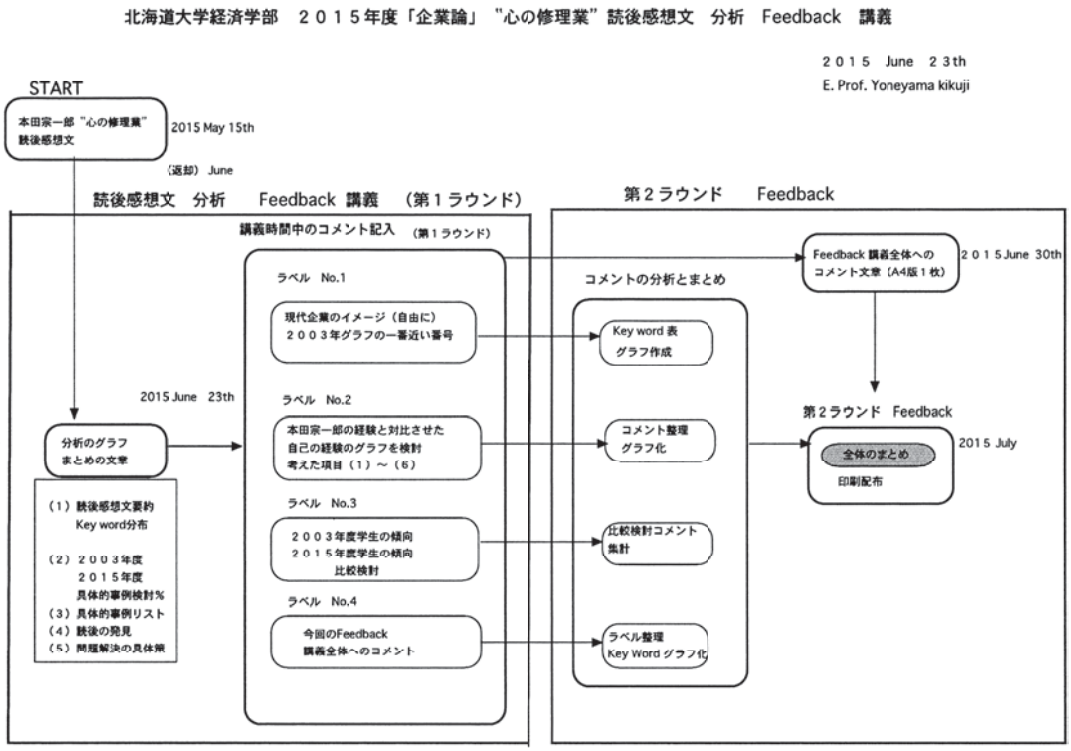


図５

表２

	男子	女子	計
３年生	36	13	49
４年生	7	5	12
２年生	1	0	1
研究生・留学生	0	2	2
計	44	20	64

析結果を報告する前にまず「企業」そのものの「イメージ」を自由に短文に書いてもらった。回答学生は55名。キーワードをピックアップしてグループ編成を行い，それに表札を付けた。表札（カテゴリー）の出現頻度は**表３**に示すとおりである。

このキーワードと表札（カテゴリー）別の出現頻度を見ても学生は，現代企業に対して「展望のない現状維持」，「人間は単なる経営資源」とするクールでプラスのイメージを持っていないことが明らかである。バブル崩壊後のデフレ経済とリーマンショック後の閉塞感の中で成長した世代としては，日本企業に明るいイメージを持ちえないのも無理のないことであろう。ただ企業が成熟した国内市場を対象に「新規経営領域の開拓」と世界市場を対象にした「グローバル化」を展開しつつあり，そこに新しい可能性を見出していると思われる[9]。

9）「第27回日経企業イメージ調査」（日本経済新聞社・日経広告研究所　2014年8～9月調査）N＝4,770。576社の企業イメージについて質問紙書留法で実施。21項目の質問に対して「当てはまる」と答えた割合（％）を得点とした。総合上位トップは，14年連続トヨタ自動車である。サントリー３位，味の素６位など総合得点を大きく伸ばした企業は，「信頼性がある」，「安定性がある」，「研究開発力・商品開発力が旺盛」で評価が高まっている。その他の項目は，「扱っている製品・サービスの質がよい」，「新分野進出に熱心」，「親しみやすい」，「営業・販売力が強

表 3　カテゴリー別出現頻度

表札（カテゴリー）［出現頻度］	キーワード
グローバル化（7）	グローバル化（4），グローバル指向（2），海外進出
利益第一主義（4）	利益追求（2），利益重視
厳しい競争環境（11）	厳しい（企業間）競争（4），国際競争（2），価格競争，シビア，競争，パイの奪い合い，強者が勝つ
能力主義（8）	能力主義（2），実力主義（2），即戦力（2），人材重視，優秀な人材
成熟市場と低生産性（8）	模倣（2），不安定（2），古い市場ニーズ，成熟，厳しい経営状態
人間は単なる経営資源（15）	長時間労働，残業，過剰労働，たくさん働く，低賃金，リストラ，低労働生産性，人を大切にしない，置き換え可能な個人，人をモノ視，契約労働，派遣労働，仕事と家庭の両立困難，株主の強い影響
効率性の追求（5）	効率化（2），効率性の追求（2），スピード
管理強化のシステム（6）	管理（2），上意下達，システム化，マニュアル化
展望のない現状維持（7）	保守的，伝統，固定観念，鋳型にはまる，非柔軟性，暗い，年功序列
新しい経営領域の開拓（9）	経営戦略，多角化，試行錯誤，技術追求，BtoB 企業の成長，パソコン活用の経営，未完成，社会貢献，生活

（ⅱ）「心の修理業」読後感想文の分析

（a）本田宗一郎のイメージ

読後感想文に書かれたエッセイを読む以前の本田宗一郎に関するイメージは，次のようなものを確認することが出来た。

(1) 本田宗一郎さんはホンダの創業者として会社のトップを走っていたというイメージが強かった。(3年生 F)
(2) 本田宗一郎さんのお名前はもちろん知っていたが，その人物像や理念，経歴にまつわる文章を読むのは恥ずかしながら初めてだった。(3 年生 F)
(3) 私は本田宗一郎についてよく調べることはなかったが，イメージは努力家の職人であった。(3 年生)
(4) Honda は大きな企業だが，その創立者である本田宗一郎という人間については何も知らなかった。私自身，車についての知識はほとんどないのだが，「ホンダが有名で本田宗一郎がスゴイ人」であるということくらいは，漠然と理解していた。そんなにも立派な会社をつくり上げた彼はどんなに強くて威厳とプライドを持つ人なのだろうかと思っていた。(3 年生 M)
(5) 本田宗一郎の自伝を中学の時に読んだことがあったが，「序にかえて」にあったような左手の数多くのキズ，ケガの話は知らなかった。(3 年生 M)
(6) 本田宗一郎は，「技術の人」であり，いわゆる職人気質の人だと思っていた。職人は「なおせばいい」の精神しか持っていないというイメージがある。(4 年生 M)
(7) 私は本田宗一郎という経営者についてあまりよく知らなかった。(4 年生 M)

これは現代日本の基幹産業である自動車産業などにあまり関心を持たない学生の一般的なイメージを示すものであるといえよう。現代日本の物的に豊かな社会は，多様な産業の生産する財とサービス，さらに情報によって成立している。しかし学生は，日常生活で直接触れ，購入する財やサービス，情報によってそれらが生産，流通しているプロセスに関して知的好奇心

い」，「顧客ニーズへの対応に熱心」などを含み全 21 項目。この企業イメージ調査は，576 社について［質問項目］を決めて，回答者の評価を問うアンケート調査の一種である。『日本経済新聞』2015 年 2 月 25 日号記事。

「企業論」講義で実施した「企業イメージ調査」は，特定の企業を準備した「質問項目」に拠り評価を求めるものではない。回答者各自の自由な「イメージ」を表現した「ことば」を，グループ編成して手作りの「評価軸」を形成しようとするものである。

を働かせることがあまりない。

大学の「講義」では，通常学生が漠然としたイメージしかなくまたあまり関心を持たない領域に関して基本的知識（抽象的概念で組み立てられた理論）を，解説して伝えようとしている。「企業」は，現代社会の重要な構成単位である。学生も１人の人間として現代社会の中で生活をしている。しかし独立して家計を営むことのほとんどない学生には，社会生活の現実感が希薄であることは否めない。主として消費者として関わる「企業」に関しても理論中心の「講義」を通して具体的でリアルなイメージを形成させるのは困難であるといえよう。

（b） エッセイからの発見

前項の「本田宗一郎のイメージ」で検討したように学生の本田に対するイメージは，TV，雑誌などで伝えられるステレオタイプのものであり，自分の経験から形成したものでないことは明らかである。では本田宗一郎のエッセイ「心の修理業」（文庫本２ページ，約1,400字の文章）を読んで学生たちは，何を発見したのであろうか。25名が次のように語っている。

(1) 本田宗一郎氏が自ら修理を行っていたことも驚きだった。(3年F)
(2) 経営者としてしか知らなかった本田さんにも泥臭い過去があるのだなと，新たな一面を知った気がした。(3年生F)
(3) 工場労働者のような手を持つ人が「社長」という地位についていることに私は衝撃を受けた。自分の持つ「社長像」が，勝手なイメージであることを知った。(3年生F)
(4) この文章を読んで，本田宗一郎は自分の想像していた社長像とは違っていることに気づかされた。名前だけを聞くとすごく偉い人であり，雲の上の存在の人であるかのように感じているからである。しかし読んでいくうちに同じ人間であるように感じた。むしろこれほどまでに泥臭く働いていたのかと驚かされた。(3年生M)
(5) 典型的な職人気質の人間であるということがうかがえた。(3年生M)
(6) 今回の文章を読み私の想像はひっくり返った。(3年生M)
(7)「心の修理業」を読み単なる能力の高い職人でオートバイや自動車そのものだけを考えていたのではなく，むしろオートバイや自動車を通して人の心を読み，考えていたことがわかった。(3年生M)
(8) 本田宗一郎さんの仕事に対する情熱が伝わってくる。こんなに手が傷つくほど夢中で仕事をしている人なのだ。(3年生M)
(9)「心の修理業」を読んでまず思ったのが，本田の仕事に対する姿勢や世界観がただの修理する人とは異なるという点である。(3年生M)
(10) 私がまず驚いたのは本田宗一郎が人間の心理的要素を大切にしていたということである。本田宗一郎は生粋の技術者であり，その腕一本で「ホンダ」という会社を大きくしていったと考えていたからだ。(3年生M)
(11) ホンダの社長だった人が話す，書くような内容となるともっと会社に大切な理念のような大げさな話だと思ったが，このエッセイの内容はとても身近で分かりやすいものだった。(3年生M)
(12) 今では世界的企業であるホンダを率いてきた本田宗一郎氏が技術力の優劣以前に，顧客から信頼を得ることそして納得してもらうことといった心理的要素を非常に大切にしていたという点は非常に興味深いものであった。(3年生M)
(13) この文章を読む前は，「あの本田さんが書かれた文章であるから，どんな内容が書かれているんだろう」と楽しみであった。他の人から聞くことが出来ない経営哲学や人生訓が聞けるのだろうと思っていた。しかし文章に書かれているのは，何の変哲もない，人として大事な，何も難しくない，基本的な内容であった。(3年生M)

(14) 本田宗一郎という人間は，取引先が大事にしている事を理解して成功したと私は感じた。(3 年生 M)
(15) 自動車をなおすというのは技術者の仕事であるが，技術者の仕事には「心を修理する」ことも含まれているというのは，今までしたことのない考え方だった。(3 年生 M)
(16) まず私がこの文章を読んで感じたことは，本田宗一郎という人物はやはり偉大な人物であるということである。(3 年生 M)
(17) 本田宗一郎は付加価値を創造する天才だと感じた。(4 年 F)
(18) 最も印象に残ったのは，本田宗一郎さんの自動車の修理に対する思いである。(4 年生 F)
(19) 筆者は情に厚い人なのだという印象を持ちました。(4 年生 M)
(20) 読み終え感じたことは一点，目の前のお客様の満足を考え「小さな配慮」を絶えず続けてきたことが HONDA のブランドの礎となり，また宗一郎が死んでも尚多くの尊敬を集め続けている理由の 1 つではなかろうかということである。(4 年生 M)
(21) この文を読み終わった後私はこれまでかかわったアルバイトでの業務を振り返った。一見無関係な職場での体験を思い返した時，著者が語っている言葉が深く理解できたように思えます。(4 年生 M)
(22) この文章には，戦後の日本がモノづくり大国として世界に誇れる技術を持つに至った理由があるように感じました。(4 年生 M)
(23) 本田宗一郎は，「なおす」対象を自動車だけでなく客の心まで含めて考えていた。(4 年生 M)
(24)「心の修理業」を読んで私がまず驚いたことは，本田氏の客に対する思いやりの心構えだ。(4 年生 M)
(25) 強く感じたことは，能力だけではこの世は生きていく上で信頼に足るものではないという認識である。(2 年生 F)

以上のように，読み流すだけでなく短いエッセイであっても読み手に大きなインパクトを与えていることが明らかである。

その読後感想文の作成は，自分の考えを文章で表現することである。学生に情報の受信者や消費者ではなく，エッセイの著者と書かれた事柄に 1 人の人間として向かい合う事を求めている。単なる傍観者ではなく文章を書く作業は，自己と著者とのやりとりを意味している。これによって知的好奇心が刺激されて「おもしろい」という感情や「新しい発見」が生まれるのである。主体的な関わりが，知的刺激となって当該領域に関する学習意欲を高める。たとえ課題として与えられたものであってもそれを達成する経験が，「自分で考えること」すなわち思考を発展させる契機となりうるのである。

「基礎的知識」の一方向伝達とその理解度を検証するペーパーテストではなく，読後感想文作成の意義はここに存在する。また提出された［課題］の個人及び学生集団に関する分析結果のフィードバックは，学生が自己を客観化，対象化，相対化して思考を先に進める具体的手掛かりとなるものである。

現代の大学教育は，時間割とシラバスを提示して当該講義科目の内容と進行の透明化を進めている。教員は教科書，参考書を指定してそこに記載されている基礎的知識（概念）を解説するために大型スクリーンにかつては OHP，近年では PowerPoint による作成資料をプロジェクターで投影している。

大学の「単位」は，講義 1 コマに対して 2 コマ分の教室外の自習が前提となっている（大学設置基準の規定）。しかし大学の大衆化，世俗化が進み教室外で自習するすなわち関連文献を読み，調査する学生は皆無となってしまった。大学ではただ「講義」時間教室に「出席」するだけで「単位」が与えられる。一定数の単位がそろえば自動的に「卒業証書」をもらえる。こ

ういう認識が社会一般にも流布するに至っている。学生は，当該科目内容の修得度ではなく「出席」が点数に評価される事を求める傾向が強い。教科書すら読まない学生も多数現れている。かくして教員は，このような授業料を払って「教育サービス」と「単位」を購入する学生に対応するために「講義」を進めることとなる。

そこでは「ミニマムの基礎的知識の理解」が，実質的な教育目標とされる[10]。学生に知的，人間的刺激を与えその人の潜在能力を引き出す啓発教育（Education）とは逆の工業製品の品質管理や自動車組立工場の生産管理の発想によるものといえよう[11]。

教科書，ノートも持たずスマホを持って教室に現れる学生に対する「教育サービス」は大型スクリーンに基礎的知識の要点を投影する解説である。また，それを縮小印刷した資料の配布である。これはもはや能力開発，人材育成の「場」ではなく「大規模養鶏場」に等しい管理システムによる「教育サービス」提供の「ビジネス組織」と言うべきであろう。大学教育の現場は，「教育サービス」提供とIT機器多用によって学ぶ主体が不在となって空洞化が，進んでいるのである。こうした顔と顔の直接的なやり取りをしない一方向の知識の伝達は，TV放送講座やMOOC（オンライン講座）に等しいものである[12]。もし基本的知識（概念）を得たい人がおれば1冊の教科書を精読して不明な用語の意味を「小事典」で確認する。さらにはInternet検索で情報を補足すれば十分であろう。大学が学習者の人間的存在を軽視してこうした個人活動でも得られる「情報」を提供するだけでは，単なる「卒業証書」発行所に過ぎなくなってしまうのである。

（c）感想文の要約

課題は，2003年と同じくA4版1枚，800～1,000字程度の読後感想文とその要約（50字程度）の作成である。

(1)「自動車修理という仕事は，単に自動車をなおすだけではなく，客の不安を取り除き，安心してもらうという心理的要素が重要である。」(3年生M)。
(2)「お客さんへのちょっとした心遣いや丁寧な説明が信頼感に結びつく。そして技術が発達した現代ほどそのような配慮は大切になるというものであった。」(3年生M)。
(3)「自動車が壊れてしまったお客さんは，その心も壊れている。その壊れた心までも治すのが，自動車修理の仕事であるという考え方に感銘を受けた」(3年生M)
(4)「自動車という人工物の修理とそれに関わってくる人間関係の大切さと気遣いをすることの大切さ。」(3年生M)
(5) この文章は最初にこの文章から読み取れる信頼の重要性を述べています。その上で今の日本企業を考え，仕事の質を上げてより顧客によりそった企業に出来ないかということを考えていこうとしています。(3年生M)
(6)「自動車修理の仕事でも，車より来客者が，相手なのであり，そのお客の心理を読んで接客することが真の熟練である。」(3年生F)

上にあげた例はほとんど本田宗一郎のエッセイの「要約」になっており，自分の書いた感想文の「要約」になっていないといえよう。こうした要約文は，読後感想文自体が，エッセイの

10）武内清（2015)「“生徒化”進む学生―柔順だが向学心乏しく」『日本経済新聞』2015年5月11日号。
11）鈴木典比古（2008)「学部改革4つの仕掛け」『日本経済新聞』2008年6月2日号教育欄。
12）三戸浩・池内秀巳・勝部伸夫（2011)『企業論－6つの企業観からみる－』（第3版）（有斐閣アルマ）有斐閣。など多数の教科書・文献が出版されている。
武藤泰明編（2006)『経営用語辞典』日本経済新

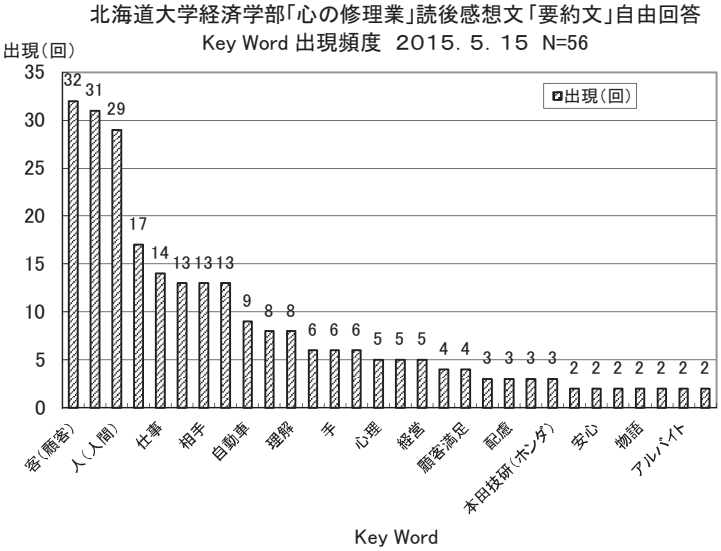


図 6

文意を理解する形で書かれていることの反映であると思われる。あるいは課題の意味を誤解していたのかも知れない。いずれにせよ高校までの国語教育とペーパーテストが文意を理解してその要点を書く事を求めて，自由な自分の考えの記述を求めない事が影響を与えているのではないか。教科書を暗記して模範解答を書く事に適応した「受験生的思考」は，自分の考えを表現する柔軟性を持っていないのである。

ただ提出された感想文には大学入試・国語問題の解答によく使われる常套句「～したいものです」という表現は見られなかった。読後感想文作成者は，既に 2 年間以上の大学生活を経験しており，このような入学試験にパスするための方便に過ぎない中立・客観性を装った表現から離脱していると考えられる。

「学生」であってもいつまでもモラトリアムを続けて，人生における重要な諸問題に対して立ち止まって様子を見ている余裕は与えられていない。リアルに現状を把握して自らの価値基準に基づく「状況判断」＝「意思決定」を行い具体的に行動する「主体性」が求められている。中立的・客観的認識を求めていると称して自らの考えを明示しないのは，思考の停止と言わざるをえないのである。タイミングを逸しては，問題を先送りするに過ぎず問題は，一層複雑化してその解決が困難になることを忘れてはならない。

（d）要約文のキーワード分布

提出された読後感想文で本文とその要約文が，記載されているものは 56 通であった。全ての「要約文」（平均約 63 字）をコンピュータに入力してキーワード 42 語をピックアップし，その出現回数を調べた。2 回以上出現した 30 キーワードの分布は，**図 6** に示す通りである。キーワードとその出現回数は

客（顧客）［32 回］，心［32 回］，人（人間）［29 回］，本田宗一郎［17 回］，仕事［14 回］，

聞社。には 800 項目の解説が掲載されている。
最近では Internet 検索で多様な関連情報の入手が可能である。基本的知識（概念）の伝達だけであれば，TV 放送講座や Internet 活用の MOOC（オンライン講座）で十分である。
日本企業の日常的な動向を知るためには，全国紙，地方紙の経済欄，経済誌，『エコノミスト』，『週刊ダイヤモンド』，『週刊東洋経済』などの点検が不可欠である。

修理，相手，モノ・物［13回］，自動車［9回］，経験，理解［8回］，親切，サービス，手［6回］，心理，学習，経営［5回］，技術，顧客満足［4回］，気遣い，配慮，提供，本田技研［3回］，不安，安心，納得，物語，経済活動，アルバイト，見習う［2回］。1回出現したのは「学習」，「理論」，「経営学」，「経営者」，「戦略」，「理念」「信念」，「人間関係」，「情報」，「熟練」，「現場」，「企業」などである。

本田宗一郎の自動車修理工の経験，自動車産業，財とサービスの売買，販売者の顧客に対する「親切」，心理的側面などビジネスの場面に考察が集中していることが分かる。

これはもともと読後感想文自体が，「文意を理解する」形で書かれていることが反映しているのであろう。

1920年代本田宗一郎が実践したビジネスの場面における経験と思索。これと時空を超えた2015年に生きて大学に学ぶ若者である「自分の具体的経験」の本質を等価変換によって同定する。この時重要なのが，思考のホームポジション（21世紀を生きるライフワークのテーマ，方法，フィールドの設定を探究する若き学徒）である。「探究する若き学徒」は，「人生いかに生きるべきか」，「切実な問題の解決」のためにそこから新しいアイデアを発想して，具体的解決策を構想し実践に1歩踏み出していくことが出来る。これに対して中立的・客観的認識を求める人は，「学校世界」に止まって自らの人生の現場における課題に向かい合う所まで歩を進めることは出来ないのである。

（e）対比検討した経験事例

2015年度「企業論」受講生から提出された読後感想文は62通である。これには要約文のないものも含まれている。母集団の質を同一に保つために他学部研究生を除外した。「先人の経験と思索に学び問題解決を実践する」の枠組みに示した思考のステップ6段階を想定した。すなわち「(1) 本田の経験　(2) 本田の思索（心の修理業，生きた哲学）(3) 自分の直接的経験　(4) 自己の経験の本質的意味を考える　(5) 現象に共通する本質の同定　(6) 問題解決の具体策・実行計画」6段階である。（**図7**）

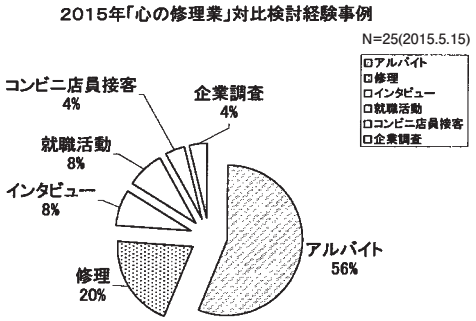


図7

最も注目したのは，著者本田宗一郎の経験に対して自分の経験を対比させる思考のステップである。本田の経験に自分の経験を対比させて考察したのは，25名，40.3%である。その経験事例の内容は，次の通りである。

(1) アルバイト（喫茶店，居酒屋，コンビニ，家庭教師，塾等）	14名
(2) 修理（自転車，デジタル・カメラ等）	5名
(3) 就職活動	2名
(4) インタビュー調査	2名
(5) 在外日系企業調査	1名
(6) コンビニ店員接客態度	1名

経験事例の内容比率（%）は，図6に示す通りである。25名のうち学生14名すなわち半数以上（56%）が，自己の多様なアルバイト（臨時の時間給労働）の経験を思い浮かべて対比させ考察している。職種としては小規模組織における対人サービス，接客などに集中している。素材に触れ，道具を使う生産労働の職種は含まれていない。「仕事」や「労働」の話を聞いた時自己の就業体験をベースに考えを発展させるのは，自然の流れである。現代の学生にとってまず「アルバイト」の就業体験を思い浮かべるのは，アルバイトがそれだけ学生生活に重要な位置を占めていることを示している。

次に「修理」は，本田が自動車修理工の経験を語るのに対して自分の使用する自転車等の機具の修理を依頼した時の経験を対比するものである。さらに「修理依頼者」の経験から本田のいう「心の修理業」を考察するものである。工業製品の種類やサイズが違ってもその「修理」を「自動車修理」と対比する思考は，直截で明快である。

卒業後の雇用を求める「就職活動」では友人の経験と自らの経験を対比させて現代企業の特質を理解しようとしている。さらに「インタビュー調査」では，企業関係者への面接調査によって企業経営の現状と問題点を考察しようとしている。また「在外日系企業調査」では，外国の現地調査によって日本企業の経営管理の特質を解明しようとしている。「コンビニ店員接客態度」では，自分が経験したコンビニにおける接客態度を対比させて「サービス労働」の本質を考察しようとしている。

他に「アニメ・ナウシカ観賞」や「福島原発事故報道」など「情報」すなわち既に他人の思考を一度通して表現された「ことば」や「映像」に接した時の自分の経験を対比させた人がいる。

本田は，故障車という具体的なモノとのやり取り（修理）の「経験」から自分の考えを発展させている。これに対して「情報」として受け止めた「経験」を具体的経験事例として想起しているのである。具体的な「モノ」や「自然」ではなく，「情報」を実在として認識しそれとのやり取りを「経験」と考える。これは断片的情報の洪水の中に生きる現代人の「情報」に対する感覚を示しているのではないだろうか。

今後，人工知能やロボットの発展によって「情報」ばかりでなく「仮想現実」が，拡大して「現実世界」との境界があいまいになる事が予想される。1つの「情報」の意味をインターネットで検索した「情報」によって理解しようとする思考様式を超えて「仮想現実」の日常生活への浸透がもたらす思考様式の変化について注目しなければならない。

（ｆ）先人の経験と思索に学ぶ問題解決の構想

先人の経験と思索に自己の経験を対比させて等価変換を行い，アイデアを得て問題解決の構想に至るまでの思考。これを展開したものとして次のようなものがある。(**表 4**)

こうした事例は，［文献（他人の経験）⇒自己の経験⇒本質の同定⇒問題解決の構想］という思考過程のフルコースをスムーズにたどっていることを示している。

エッセイで記述された事柄に対して自分の経験的事実を思い浮かべてそれを対比させて思考しているのである。これはたとえ本人が自覚していなくても自己のアイデンティティをしっかりと持っている人であるといえよう。

自分の立脚点が明確であるから著書を読んでも記述された事柄を「我が事として受け止めて」，自分の問題解決に活かしていく思考に発

表 4

自分の具体的経験事例（学年 M.F）	問題解決の構想
(1) アルバイト（飲食店）［3 年生 F］	仕事をする上で大切な要素を知ることが出来た。また自分の今までの仕事に対する姿勢を振り返り反省して，これからの仕事に対するモチベーションにつなげる事が出来た。
(2) アルバイト（家庭教師）［3 年生 M］	仕事の親切とは，重要なものであり，顧客満足を高めることにもつながっていることであるから，今後もこのことを念頭に置き，行動をしていきたい。
(3) 修理（デジタル・カメラ）［3 年生 M］	本田宗一郎の親切という形で信頼を得て不安や怒りを取り除くということは，自動車業界に限らず，人が人として生きていく上ですばらしい教訓であり，哲学であると感じた。私もこのような哲学を持った人格者となれるよう親切心を大切にしていこうと考える。
(4) 修理（自転車）［3 年生 M］	心構えは，仕事に関わる全ての人が，持つべきものなのだろう。言葉にするととても簡単なように聞こえるこの哲学は，すぐにできるものではないと思うが，そのための努力を惜しむものではないと思った。
(5) アルバイト（飲食店）［4 年生 F］	「生きた哲学」を発見し，自らの手で世の中に出していくことが，筆者の本当に伝えたいことではないだろうか。私もそのような人間を目指して，日々出来る限り多くの物事をこの視点で見て実践していきたいと感じた。

展するのである。つまり自己の立脚点が，明確であれば思考の着地点も見つける事が出来るのである。単に文意を理解しようとするのであれば，著者の世界に入り込んで語句の解釈に終始して著者と一体化する道をたどることになる。その著者の理論や学説に囚われてしまい，そこから1歩も出る事が出来ない。歴史的，世界的に有名な著者であればそれだけ一層強く引き込まれることになる。だが自己のアイデンティティが，明確であれば帰ってくるべき着地点を見出すことが出来る。

いかなる理論や学説も自分の生きる現場における具体的事実と経験により「検証」して，その有効性を確認すること。ここに実験精神の発揮が必要なのである。

情報化社会では（自己）と（事象）の間に「断片的情報」の洪水が，溢れている。押し寄せる断片的情報の洪水に直接的なやりとりが阻害されて，具体的事実や経験の意味を自分で考える機会を失ってしまう。IT 機器の発達と普及は，この傾向に拍車をかけていることに注意しなければならない。それゆえ日頃から自己の経験を言語化し，文章化して表現することは，思考を正常に保つためにはますます重要になっている。大学の講義における基本的知識の一方向の伝達は，学生の思考力の向上に結びつかない。教室には，学生集団内で自己の「経験」を考え，語り，書き，表現する身体行動と場面が欠落しているからである。

先人の経験と思索に学び自らの経験的世界と等価変換を行って考え，そこから新しいアイデアを発想することが出来る人には，現場からのイノベーションの推進を期待することが出来る。

4．学生の思考様式の比較検討（2003 年度と 2015 年度）

2003 年度「企業論」受講生の思考様式と 2015 年度「企業論」受講生の思考様式の傾向を検討してみよう。

2 時点でエッセイ「心の修理業」読後感想文に記された「自己の具体的経験」を点検してその件数を確認した。結果は図 7 に示すとおりである。単純な時系列上の推移の意味を考えることにしよう。12 年を隔てた時点での差異をどのように評価するかによって見解が分かれることになる。

まずエッセイの「文意を理解する」形で感想文を書いた人が（72%，59.7%）と約 60% 以上ということに注目すれば，多数派には「大きな変化はない」と考えられる。

他方少数派であっても具体的経験を対比検討したグループは（28%⇒40.3%）と増加している。これに注目すれば「変化あり」と考えられる。

12 年の歴史的時間を経過した時点における学生の思考様式の差異は，何によってもたらされたのであろうか。2015 年度の学生自身に，比較のグラフ（**図 8**）をフィードバックして，この差異に関するコメントを求めた。

彼らが自らの実感と経験に基づいて指摘したコメントの内容は次のとおりである。

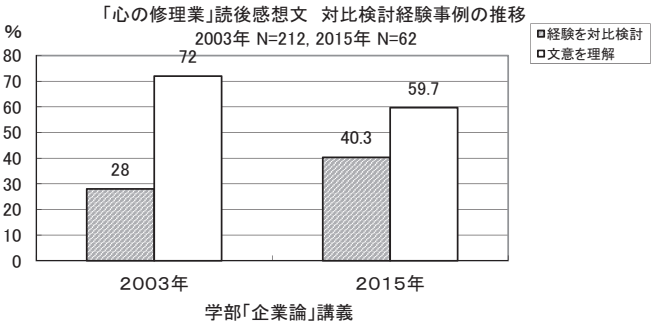


図 8

（Ⅰ）母集団の性格の差異

2003 年度は 2 年生中心である。他方 2015 年度は，3，4 年生が中心である。大学生活の経験年数の違いが，書くことに影響している。

（Ⅱ）具体的経験を対比検討しない多数派に変化なし

(1) 学校教育の影響

（ⅰ）小学校以来教科書に書かれた「知識」を暗記することばかり教えられてきた。これまで考え方についての教育を受けたことがない。

（ⅱ）受験勉強では，自分の考えや意見を書くのではなく，試験官に受け入れられやすい文章を書くことを指導された。

（ⅲ）大学入学後の課題レポートも資料や参考文献を読んでその要点を書くだけであった。自分の経験を書くとは考えに入っていなかった。

(2) IT の影響

パソコン，インターネット，スマートフォーンが普及して「情報」の入手が容易になって，自分で考えなくても済んでしまう。

（Ⅲ）具体的経験を対比検討する少数派が増加

(1) 学校教育の影響

（ⅰ）小中高時代の「ゆとり教育」で自分の思いや経験を書く機会があった。

（ⅱ）大学入学後の授業で事例研究や自分の経験を考える機会があった。自分の経験に即して考える習慣が身についた。大学教育の成果が出ている。

(2) アルバイトの影響

学生にとって学費を支弁して学業を続けるためには「アルバイト」が不可欠になり，学生生活の 1 部になっている。それだけいっそうアルバイトが学生の意識に大きな影響を与えている。仕事やビジネスの話を聞くと自分のアルバイトのことを思い出す。

(3) 就職活動の影響

労働条件の良い正社員になる就職は，学生にとっては最重要課題である。就職活動では「エントリーシート」の記入が必須となっている。記入には「自己分析」が必要であり，自分を内省する機会になっている。

(4) IT の影響

現代は不安の時代である。多様な IT 機器を活用して入手した情報も取捨選択しなければならず，最後は自分で考えなければならない。

《学年の差の影響》

まず「読後感想文を作成した学生の学年の違いが，「自己の経験事例」を記述する比率に影響を与えているのではないか。学生生活の 1 年間で学生は大きく成長しており，それが感想文の書き方に表れているのではないか。この見解は説得力がある。

《具体的経験を対比検討しない多数派には変化なし》

次に経験事例を書いた人の比率は，増加したといっても約 40% にとどまっている。その背景には日本の学校教育制度と情報技術の技術革新による IT 機器の普及が大きく影響していることを挙げることができる。19 世紀明治の後進国日本が，欧米先進諸国に追いつくため「学

校教育」は，民衆の生活「経験」から切り離されて，輸入翻訳された「概念」を教科書で教えるものであった。高等教育機関，大学は欧米諸国で開発された科学技術の理論の導入のため「技術移転センター」の役割を果たした。当然語学が重視された。1980年にはすでにキャッチ・アップを達成したにもかかわらず，日本人は「後進国意識」と「キャッチ・アップ思考」の惰性に流されている。21世紀初頭の現代にあっても「自主技術開発」による内発的発展への転換を積極的に押し進めようとする意識は弱いままである。

輸入翻訳概念や理論を日本の自然や現実に当てはめるのではなく，逆に日本の自然や現場における具体的事実の観察，観測，「経験」から「概念」を形成し理論を構築していく。これは内発的発展の原則である。だが日本における研究は，世界の最先端研究に関心を集中させて，先端理論に対応した「専門」を決めて組織を組むために研究の1層の専門化，細分化が進む結果になっている。総合研究，学際的研究といえども単なる細分化された「専門」の寄せ集めに過ぎないのが現状ではないだろうか。「専門用語」が，研究者相互のコミュケーションを阻害することになっているのである。

世界の自然や現場において発現する具体的事象の不思議を解明したいという知的好奇心に基づく探究心が，研究の根源的な力なのである[13]。

しかしこうした探究精神が，蓄積された膨大な「情報」と研究者を取り巻く競争関係によって阻害される傾向がある。その結果解明したい事象に焦点を合わせて手作りのオリジナル・アイデアを創りだすことを忘れて既存のアイデアや理論から研究をスタートさせることになる。これでは既存の理論の追試，二番煎じの研究に終わってしまうのである。オリジナル・アイデアとそれを検証する独創的な方法論もないままに成果を上げようとするとデータ捏造，盗作，盗用に手を染める事になってしまうのである[14]。

近年文科省によってITの小学教育への導入が計画されている。だが都市に生まれ育った人は幼児期より自然の中で仲間と夢中になって遊んだ経験を持っていない。幼少期に自然や具体的なものに直接触れる経験すなわち「原体験」は，自己の判断基準となる「ものさし」を建てる礎石というべきものである[15]。

これがなければいくらIT機器による情報検

13）下村脩（2009）『クラゲの光に魅せられて―ノーベル化学賞の原点』朝日新聞出版。下村脩博士は，若き日にクラゲが光るのを不思議に思い，研究者となってひたすらクラゲの光源になる物質を解明する研究に打ち込んだ。そしてついにイクリオンとGFP（緑色蛍光たんぱく質）を発見したのである。モラトリアムと学歴病で「自分が何を研究したいのか明確でない人」が，大学院に進学する。自分が何を研究したいのか解らない人が「研究者」というポストを得たいのである。大学の大衆化，世俗化によってこうした本末転倒が日常化している。下村博士の研究姿勢を学ばなければならない。

14）須田桃子（2015）『捏造の科学者―STAP細胞事件』文芸春秋。アメリカ留学の後，理化学研究所ULとなった小保方晴子氏は，STAP細胞の研究成功をアピールする「プレゼンテーション」を行った。しかし後日データの捏造が判明。STAP細胞研究は，科学研究史に残る一大スキャンダルとなった。博士論文もカット・アンド・ペーストで作成しており，学部，大学院における基礎的訓練が決定的に不足している。関心が真理の探究にあるのではなく，社会的地位と名声の獲得にある。「研究者」である前の人間としての基本的倫理性の欠如が根本的問題なのである。東京大学ではデータ捏造，改ざんを理由に，分子細胞生物学研究所で取得した3名の博士学位の取り消しを行った（『朝日新聞』2015年3月27日号）

15）日本語で自分が興味を持ち観察した事象や経験を正確に記録，表現する事が，科学的探究の基本である。明治以来の蓄積によって科学の基礎概念は日本語に翻訳されている。論文を書く前のアイデア作りには，個人の感受性や母国語の表現能力が重要である。論理的に詰めて考えていくのも「日本語」で十分である。出来あがった日本語論文を「英語」の学術用語に翻訳表現して論文に仕上げればよいのである。松尾義之（2015）『日本語が世界を変える』筑摩選書。

索に習熟しても得られた情報を評価，判断して「自分で考えて」行動することはできない。ただ断片的情報の洪水の中に漂うばかりとなってしまう。

学校というシステムは，生徒・学生に組織及びその後ろに控えている社会への順応，適応を直接間接に教えるものである。だがこれが生徒の冷めた反応を呼び起こすことにもなっている。生徒学生は「学校」を単なる通過点としてしか見ておらず，積極的に関与するよりも「教育サービス」を受けるだけで通り抜けようとするのである[16]。

世界中のコンピュータがネットワークでつながり，そこに蓄積されている「情報」へのアクセスが可能となった。IT の技術革新はビッグデータの活用，人工知能，ロボットの高性能化を実現しつつある。さらに断片的情報の爆発に加えて「情報」が作り出すもう一つの世界，「仮想現実」がリアルな現実世界に浸透して，その境界線があいまいになるばかりである。こうしたマクロトレンドの影響力はますます強くなることが予想される。自然を離れた都市の人工物（すべてが情報化されている）に取り囲まれて生まれ育った人々に与える影響は想像を超えるほどになっていると考えられる。

《具体的経験を対比検討する少数派が増加》

学生の学年（年齢）の差があっても読後感想文に書かれた経験事例検討の増加（28%⇒40.3%）をもたらした要因は何なのだろうか。

まず「学校教育では 1980 年に小学校教育から始まった小中高時代の「ゆとり教育」の影響を考えることができる。知識重視の「詰め込み教育」から学習内容と授業時間を減らした「経験重視型」教育が「ゆとり教育」である[17]。自分の経験を語り，書くことを重視したため読後感想文でも自分の経験や考えを書くようになった。こうした教育を受けて大学に進学した人は，今回の「読後感想文」を書くにあたっても自分の経験事例を書くことに抵抗がなかったのであろう。

さらに北海道大学入学後の講義科目でも「事例研究」や「自分の経験を報告する機会があって，これが読後感想文で「自己の経験事例」を検討することにつながった。

2008 年のリーマンショック以降日本は長期不況の中にあり，家計に占める教育費の負担は増大している。学生には学費を支弁して学業を続けるため「アルバイト」による収入が不可欠となっている。アルバイトは，講義，ゼミナール，サークル活動等の課外活動とともに学生生活の重要な一部となっている。誰かの仕事の話を聞いたり，読んだりするとき自分の従事するアルバイトを思い浮かべるのも自然の流れとなっている。

また 3 年生になると就職活動に向けて何らかの準備が始まる。自分の性格や能力に見合った職業は何かを考えて，労働条件の良い正社員の就職先を見つけることが最重要課題となっている。求職申込書，エントリーシートには「自己分析」の結果の記入が求められている。このエントリーシート作成のための「自己分析」は，自己を見つめて内省する機会となっている。就職活動の準備，推進はいつも気にかかることであり敏感になっている。このような日常の気分が読後感想文における考察にも反映していると考えられる。

最後に「学校」を取り巻く社会の情報環境が，断片的情報の洪水であったとしても結局のところ人は検索した情報を基に自分で考えて行動しなければならない。IT 機器をうまく使いこなせれば，自分の考える力を向上させること

16）大多和直樹（2014）『高校生文化の社会学―生徒と学校の関係はどう変容したか』有信堂。
武内清（2015）「“生徒化”進む大学生―柔順だが向学心乏しく」『日本経済新聞』2015 年 5 月 11 日。
日本青少年教育研究機構（2015）「日・米・中・韓高校生調査」（2014 年 9 月～11 月，4 ケ国高校 1～3 年 7761 人対象）。日本の高校生「自分はダメ 7 割」で米中韓より突出している。（『日本経済新聞』2015 年 8 月 29 日号）。

17）内山乾史，原清治編著（2006）『学力問題・ゆとり教育』日本図書センター。

ができるのではないか。情報社会にも可能性を見いだすことができる。

経験事例対比検討増加の背景には以上のような諸要因を考えることができる。

IT 技術の技術革新が急速に進展する「情報環境」のマクロトレンドは，人々の「自らの経験」や「具体的事実」に基づいて自分で考える思考のベクトルを弱体化する可能性が大きくなることを否定できない。こうした流れに対して1980 年以来実施された「ゆとり教育」の「経験重視」と大学教育新カリキュラムの「事例研究」や「経験」の発表機会が，効果をもたらしている。それは学生の「経験」と「具体的事実」を重視する思考のベクトルを強化している。

しかし，ゆとり教育は学力低下を招いたとして既に方向転換がなされている。また大学は少子高齢化，過密過疎，18 歳人口減少によって学生定員割れと財政難に直面し，その改革は待ったなしである。現在進められている改革は学生の潜在能力を引き出す啓発教育（Education）よりも「情報教育」,「キャリア教育」さらには「英語教育」を充実させる方向に向かっている。

この情報教育は，戦後文部省が推進した視聴覚教育の延長線上にあって高性能情報端末（タブレット等）を生徒学生に与えて，その操作に習熟させようとするものである。問題は情報の検索や操作は，あくまでも情報の受け止め手の作業に過ぎないことである。重要なのは「情報の作り手」としての能力を開発して「自分で考える力」を向上させることである。まだ「情報化」されていない事象を自分の言葉や絵画や映像などで「情報化」する能力が必要なのである。この能力を磨かなければ，情報の消費者にとどまり，そのコストを払い続けなければならない。安易な情報処理（コピー・アンド・ペースト）は，著作権侵害になるリスクも大きいことを自覚しなければならない[18]。

最近の大学教育は，基礎的知識を一応知っており，社会的要請である「即戦力」すなわち「学士力」（文科省）「社会人基礎力」（経済産業省），その中核として情報処理力を持つ事を目標にしている。さらに英語教育でビジネスのグローバル化時代の人材育成に応えようとしている[19]。

明治以来の教科書中心の後進国型教育は，先進国から輸入翻訳された知識の記憶を重視しており生徒・学生に「単一正解思考」を植え付けるものである。構成の情報端末スマホでの情報検索は，インターネット上に「正解」を示す情報が存在しているという「信仰」に支えられているといえよう。関心の中心が紙に印刷された「教科書」から IT による検索「情報」に転換されたとしてもそこでは「事象」に素直に向かい合い自分の目で見てやりとりをしながら考えるステップが省略されている。

教科書を暗記中心の教育及び受験勉強で強化された「単一正解思考」とインターネット上に「正解」を示す情報を検索する思考は，強い親和性をもっている。共通して現場の具体的事実と経験が欠落していることに注意しなければならない。

そもそも啓発教育は，オーダーメードであり顔と顔の直接の関係において成立し，手間，ヒマ，経費のかかることである。だが「大衆化」,「世俗化」した現代の大学は，多数の学生を啓発教育するに必要な資源（財政的基盤，施設，教員と事務員）を持っていない。経営維持のためには効率の良いレディメイドの「教育サービス」の「大量生産」を余儀なくされている。教育目標の「個性尊重」,「人間性尊重」と

18）東京大学教養学部では，同大学後期課程（3～4年生）の学生が学期末の課題レポートに「文章の約 75% が，インターネット上に公開されている文章からの引き写しだったことが判明」。「他人の文章の無断借用は，剽窃であり，学問上許されない」として単位認定には，「厳正な処置を取った」(『読売新聞』2015 年 3 月 12 日号)

19）文科省は，国立大学に文系見直しを通知した。「特に教員養成系や人文・社会系学部・大学院は，組織の廃止や社会的要請の高い分野に転換する」ことを求めた（『朝日新聞』2015 年 6 月 9 日号）。

は逆にそこには人間ではなく「モノ」の「計数管理」の思想が隠されている。自動車組立工場の部品供給，養鶏場の飼料供給等の管理システムに類似したシステムによる運営を導入せざるを得ない状況である[20]。ここに大規模化した現代の大学教育が持つ絶対的矛盾が存在している。

人は自然や社会に直接触れて，人との心を開いた交流がなければ精神のバランスと健康を維持することはできない。大学で「情報」操作ばかりを教えられても学生は自分がやっていることに手ごたえを感じることができず，また自信が持てないのである[21]。

大学教育は学生が内発的感動とともに知的好奇心を働かせて物事に素直に取り組む姿勢を陶冶することからスタートしなければならない。そのためには教員－学生，学生相互の顔と顔の直接的交流が不可欠である。「ゆとり教育」と「大学教育新カリキュラム」は「具体的事実」と「経験」を基にする思考の発展を促して一定の成果を上げてきたことは明らかであろう。

しかしこうした思考が，マクロな情報環境とIT技術革新に折り合いをつけながら今後も発展していくのであろうか。それとも「断片的情報」と「仮想現実」にのみ込まれてしまうのであろうか。近い将来その「技術的特異点」に達して趨勢は明らかになるであろう。

このようにITが現実の職業生活に大きな影響を与えることが予想されている。

1980年代に始まる生産工程の自動化，ロボットの導入は，省力化によってブルーカラー（現場作業者）の職務と雇用に大きな影響を与えた。熟練工の持つ「技術・技能の伝承」が，深刻な問題となった[22]。

今後進展するIT技術革新は，AI（人工知能），ロボットを飛躍的に高性能化させて工場の生産労働ばかりでなくホワイトカラー労働にも影響を与える。受付や店員などの単純接客業務はいうまでもなく，知的職業とされてきた個人向け投資アドバイザーの仕事もロボットに代替されることが，予測されている[23]。

ITは，人々の思考や精神生活にまでも影響を与えて人間的存在それ自体及び社会が，大きく変質せざるを得ない歴史的転換期を迎えようとしている[24]。

20）鈴木典比古（2008）「学部改革4つの仕掛け」『日本経済新聞』2008年6月2日号。

21）グループダイナミックス研究所（東京）2012年調査。関東・関西12大学の学生2,166人のアンケート調査。「3人に1人が，自殺を考えた」（『東京新聞』2012年9月11日号）。
内田千代子（2009）『大学における休・退学，留年学生に関する調査』『第29回全国大学メンタルヘルス研究会報告書』大学生のメンタルヘルス問題は，深刻化しており改善の兆しが見えない。

22）米山喜久治（2000）「現代日本造船業における技能の伝承」『日本労務学会誌』第2巻第1号，同（2003）「人材開発研究へのアプローチ」（No. 7）『經濟學研究』（北海道大学）Vo. 53. No. 2。

23）Frey Carl Benedict and Michael A. Osborne（2013）“The Future of Employment: How Susceptible are jobs to computerization?” September 2013　Oxford University.
ニコラス・G・カー／篠儀直子（2015）『オートメーション・バカ』青土社。

24）「情報空間をサーフィン」，「仮想現実」と「リアル現実世界」を行き来する。さらに現実世界では，衝突や摩擦を避けるためにその場その場の雰囲気に合わせて自己を演出していく。そこに何の違和感，矛盾も感じていない。こうした意識と行動様式を持つ人間の在り方を，一貫した自己（人格）を表わす「アイデンティティ」で把握できないであろう。従来の社会的常識では一貫性のない人格「二重人格」は，狂気を意味している。断片化した「人格」同士が触れ合ってもお互い相手のどこを信用してよいのか解らない。相互信頼が成立しなければ，社会は成り立たない。従って「断片的情報」に引きずられて「人格」は「断片化」される。同一価値基準の共有化がない時に起こる「アノミー」以上の衝撃力を持って社会は解体される。個人は砂のようにバラバラな存在となるのではないか。直接の顔と顔の関係も希薄化して，居住地域（典型的には大都市のマンション）であっても人々は共に生活をしているという感覚を共有する事が出来ない。そこからは「自治」，「民主主義」という観念は消え去っていく。他人と共に働く（チームワーク）の意識もなくなる。人

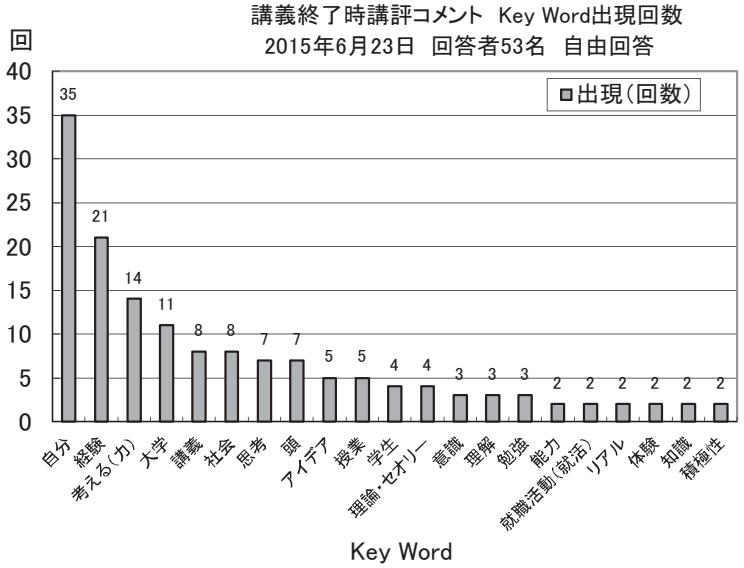


図 9

5．講義全体へのコメント，評価

2003 年度『企業論』(28 回) は，全体としてインシデント・プロセス法を援用する形で進められた。7 回のゲストスピーカー（7 名）の招聘，DVD を活用した企業インタビュー演習，事例研究として本田宗一郎のエッセイ「心の修理業」読後感想文作成の課題，各回のコメント及びアンケート調査の分析結果のフィードバック，情報（データ）の共有化と累積化を行った。今回のアドホックな講義は，事前に提出された同一エッセイの読後感想文の分析結果をフィードバックする形で進められた。2015 年 6 月 23 日講義終了後，受講者に今回の講義全体についての講評・コメントを求めた。回答者 53 名の全コメントをコンピュータに入力。その短文（平均約 60 字）に記されたキーワードで出現頻度 2 回以上のものをピックアップした。それらのキーワードと出現頻度は，**図 9** に示す通りである。

また出現頻度 1 回のキーワードには，「問題解決」，「目的」，「教養」，「基礎」，「異業種」，「専門」，「頭脳労働」，「現場」などが確認できた。

学生諸氏は，まずエッセイの読後感想文の作成作業を通して教科書によって「理論」と「概念」を理解することとは違う「事例研究」の意義を知ることが出来た。著者の経験とナマの声に接して，これまで漠然としていた技術者であり本田技研工業（ホンダ）の創業者，経営者であった本田宗一郎について新しい発見をして，彼の仕事の流儀，生き方に驚いたのである。教科書で理論と概念を基礎知識として伝達する通常のスタイルの講義が，理論に特別に関心を持つ学生以外には面白くないのが現状である。教科書には生身の人間が登場せず，たとえ登場しても国も時代も違うのがほとんどである。21 世紀初頭日本に生きる若者としての自分にとっては，それを「我がこととして受け止める」ことは難しい。このエッセイは，ほとんど基礎知識を必要とせず，読めば解る日常生活について

間はスーパーコンピュータにコントロールされた「システム」の端末に直接つながってそこから与えられる指示でシステムを媒介として動く「人間ロボット」になるのではないか。

書かれた内容となっている。

既に歴史上の人物である本田宗一郎の経験とユニークな思索が，やさしい日本語で語られており読む者に新しい発見，驚きや感動を与えるのである。

古典を読むことは思考の集中を必要とする。それと同じようにたとえ文庫本2ページ程の短い文章であっても，読んだ後感想文を作成するためには，著者とその主張に向かい合って自分で深く考える事が必要とされる。

提示された「枠組み」（先人の経験と思索に学ぶ）によって問題を発見して，その問題を解決する一単位の思考過程の全体と「経験」の位置を知ることが出来た。また分析結果データによって自分の思考様式の特徴と学生集団の思考様式の特徴も知ることが出来た。さらに教科書に書かれた「理論」やITで検索した情報に依存するばかりでなく，自分の目で見て「考える」ことの重要性を再確認したといえよう。

2003年度『企業論』では，講義内容をシラバスで提示した。講義は，ゲストスピーカーの招聘を中心にしてそこから新しい発見が可能なように組み立てて展開した[25]。特にゲストスピーカーによる講演のテーマは決まっていたが，その具体的内容は企画・運営者の筆者にも教室でそれを聴いて初めて知るものであった。講義中気がついた事を記録する（ノートテイキング），フィードバック資料の分析・コメント作成，終了後のコメント作成。これを累積していくと段々とシラバスに記載した内容が理解できるように設計しておいたのである。しかし教科書に沿って理論体系と概念の説明をする講義に慣れた学生には，まず現代日本企業の現状と課題を知ることから「一般的概念」にアプローチするという講義スタイルを理解することが容易ではなかった。これは大学入学後も大学というシステムに管理され続けてそれに適応したため受験時代の「単一正解思考」から脱却出来なかったことを示すものであるといえよう。

予告通りの時間に予告通りのモノが，提供されないと不満や不安を感じる感覚の持ち主になっているのである。予告通りに進まなければ企画・運営者の準備不足，力量不足のクレームが提出されることになる。「自然や社会は不確実性が満ち溢れている。物事は実際にやってみないと解らない事ばかりである」という事実を受け入れる思考の柔軟性が存在しないのである。計画表（フローチャート）を示してことばで説明しても具体的に理解することを期待できないのである。まず物事は，計画した通りに進む確率が低いことを知らなければならない[26]。

一般常識では「教養」とは，「いろいろな知識や抽象的概念を知っている」ことであるされている。しかしそれが「他人の仕事の世界すなわちその人の仕事ぶりと作品に関心を持って謙虚に学ぼうとする態度である」ことには考えが及ばない。単に知っているだけではなく，具体的な場面における多様な人間の活動に関心を持つ事が重要である。この学ぼうとする時にセンサーの役割を果たすのが，知的好奇心である。素直に向かい合いやり取りをして理解するためには，共鳴板が必要である。その共鳴板の基礎となるのが，過去の経験である。たとえ小さな経験であっても意識化して言語に表現する。「これは面白い。なぜこんな事にこうしたやり方になったのか。」と。作業が行われる環境，目的，方法，道具，素材さらにはその作業の前後のつながりと仕事の全体に占める位置。出来あがった作品。これらを身体感覚で受け止めて注意深く観察して考える。こうして1つの作業（経験）の意味を深く考えることは，センサー

25）当事者（経営者や管理者）が自由に語る話を聞いてそこから当該組織の現状と問題点を把握し，その解決策を構想する事例研究法（インシデント・プロセス法）を援用した。

26）出版されたテキストに記載された「知識」の伝達を秒単位で計画，正確に実行しているのが，放送大学講座である。
ジョージ・リッツア／正岡寛司訳（2008）『マクドナルド化する社会』早稲田大学出版部。

の感度を上げて次に出会った事象（経験）の理解力を高めることが出来るのである。

「企業論」講義では個人のコメント等のデータを整理してフィードバックし集団内で「共有化」する。さらにこのデータに関するコメントの作成を行った。このような「個人」⇔「集団」の往復による情報の「共有化」と「累積化」。さらに各自が累積した情報を「構造化」することによってシラバスに記された「企業論」の全体像と進行（流れ）を把握する。

こうした手作業によって初めて「ことば」で説明されている事柄の意味を理解することが出来るのである。「一単位の知的生産の仕事」は，教科書に書かれた知識を記憶して，試験問題への解答には「正解」を記すという「受験勉強」とは質的に違う事を理解しなければならない。手と頭と心と体を使って考える全人体的活動なのである。

「ことば」によってミニマムの活動を記載しているマニュアルは，読み手が他の場面における多様な経験を一定以上持たなければ理解して行動に移ることが出来ないのである。

マニュアルを「実行」するには，こうした経験に基づくイメージ力が不可欠である。具体的事象の観察や経験をベースにして作成したデータ（断片）を統合して全体像を描く手作業をする。すなわち「手で考える」ことによってはじめて「事象」に潜在している「構造」が浮かび上がり，それが動いている論理（流れ）が見えてくる。事象を構造として把握してこれが自己の経験に基づくイメージと結びついた時に実行することが出来るのである。

外部情報やシステムへの過度な依存が，現場の事象を観察しその意味を考える事を阻害して状況判断力を奪う。3.11 東日本大震災時石巻大川小学校の教員は児童の「ここにいたら死ぬ」という声を無視して襲い来る大津波を前にして無為に校庭で待機するばかりであった。その結果 74 名の児童が犠牲になる大惨事となってしまった。大事なのは「情報」ではなく，自分の目で見て体で感じ考える力である。“津波てんでんこ”つまり先人の命によって購われて伝えられてきた知恵。この「生きる知恵」こそ情報化社会における管理システムと断片的情報の洪水の中にあっても生き抜く力であることを忘れてはならない[27]。

今回の講義で触発された考えを次のようなコメントで確認することが出来る。

(1) 今日の講義で自発的に考える大切さを理解できたが，そのための経験も同時に欠かせないものであり自分に不足していると思った。(3 年生 F)
(2)「これから先自分の経験に基づく自分の意見を大切にしたいと思いました。「自分はどう思うか」意識したいと感じました。(3 年生 F)
(3) 問題解決というところまで思考が進んでいない。そういうところを直していきたい。(3 年生 F)
(4) やはり経験というものを大切にしたい。また自分で考えることも必ずやっていきたい。(3 年生 M)
(5) 既存のセオリーに頼りきっているのではなく，自分の目で見て物事を観察し，思考しなければならないと思った。(3 年生 M)
(6) 自分は経験することも少なかったし，経験を通して自分で考えることも足りない。(3 年生 M)
(7) 今まで小さな経験は，軽視しがちであったが，今日の講義を踏まえて経験をもとに自分自身がアイデアを出せるような人間になりたいと思う。(3 年生 M)

27) 米山喜久治（2011.7)「“情報”の前にある“現場の経験”」日本労務学会第 41 回全国大会研究報告論集。
池上正樹・加藤順子（2012)『あのとき大川小学校で何が起きたのか』青志社。

(8) 先人の経験や思索を自分のことと考え，現象に共通する本質を考える事が大切だと思った。(4 年生 M)

6 月 23 日講義終了後の講評コメントに続いて 1 週間後合計 15 通（3 年生女子 7 名，3 年生男子 6 名，4 年生女子 1 名，4 年生男子 1 名）の講義講評レポート（A 4 版 1 枚）が提出された。講評レポートの要点は次の通りである。

(1) 図が多くて解りやすかった。今自分に足りていないのは考える力だと思った。(3 年生 F)
(2) すごく面白かった。理由①参加型の講義②こんなにメッセージ性の強い講義は久しぶり③感想文の分析結果，2003 年との比較（3 年生 F）
(3) 感想文の詳しい分析，フィードバックを予想していなかった。とても興味ぶかい 90 分の講義であった。「生涯勉強」ではなく「生涯研究」が，一番印象に残った。(3 年生 F)
(4) 講演で今やらなければならない事が，明確になった。自分の弱点克服を促す良い時間でした。(3 年生 F)
(5) “頭を使うこと”の大事さを改めて知ることができた。3 年生の時に話が聞けてよかった。(3 年生 F)
(6) 複数の衝撃を受けた。大学生活が後半になる時期に新たな考えを得る事が出来て良い経験になった。1 つ目。授業スタイル。前の座席で先生と学生のやりとりの意味を認識出来た。2 つ目。教育の意味，ドイツ語語源「前にひっぱり出す」を聞いて納得。3 つ目。自己分析ではなく，面白かったこと，感動したことをつないで「自分」を確認するという言葉が非常に印象に残った。(3 年生 F)
(7) 講義を受けて「経験，等価変換，問題解決」のプロセスの重要性を知った。我がこととして受け止めて考えて問題解決につなげることが出来る。(3 年生 F)
(8) 情熱がこもった講義であった。これから必要とされる人材は，自分の頭で考えることが出来，明確な答えのない問題に対しても積極的に挑む人間である事が理解，納得された。
私は小学校の頃から読書感想文というのは，本の中身を通して自分を語るものであると教わっていたので今回の感想文でも自分の経験を書くことが出来ました。等価変換という考え方についても初めて知りました。違う現象の共通する本質を見抜き，それをアイデアとして自分の中に貯めておくことで問題に対する解決策を導き出す。このような問題解決思考プロセスの中で重要なのが，本質を見抜く等価変換の部分です。物事の本質を見抜くのは難しいですが，単純にそのまま情報を受け取るのではなく，その裏には何があるのか，他の情報とのつながりはないのかなど，注意して見るくせをつけるようにしたいと思います。(3 年生 M)
(9)「経験，等価変換，問題解決思考」の重要性について考えた。様々な場所から自分のためになることを吸収していくことが大事だと感じたので，日頃から実践したい。専門分野から「部分」に着目した「分析」ではなく，「全体」を五感・直観を活かして受け止め，自分の経験を基に描き直すという話は，面白かった。(3 年生 M)
(10) 2003 年も今年も「自分の経験」を比較検討する人が，50% に満たない事に驚いた。
経営上の問題でもその解決に「異業種の現場で最先端ノウハウを学ぶ」という考え方に納得した。(3 年生 M)
(11) 今回の講演を通して今一度学生生活で一体何をすべきかをよく吟味することが必要であると感じた。(3 年生 M)
(12) 参加型に授業のイメージが強く，とても楽しめた。「異業種の最先端の技術を学ぶ」という話はとても興味があった。2003 年と今年の比較が面白かった。(3 年生 M)

(13) 質問の仕方が，選択の余地のないようなスタイルであった。学生を指さしするのは，高圧的な印象を与えるのでよくない。良かった点は，1人1人の感想をすべて丁寧にみてくれた事である。ここに書いた先生のコメントの解説をもっとすべきであった。(3年生M)

(14) 印象に残ったのは異なる現象の中から本質的なものを見つけることの重要性です。社会で通用する人間になるためには，このような能力が必要であると思います。残りの学生生活の中で，このような力を少しでもつけることが出来るように，自分の経験を増やし，他の人の話を聞いたり，教養を身につけたいと感じました。(4年生F)

(15) 今回の講義では，あらゆる事柄は自分自身の経験に当てはめて考えることで自分を成長させる機会になるのだと感じました。今後は他人の経験と自分の経験を比較して本質を見極めるだけではなく，それを将来にどう活かせるのか，それが自分の人生にどう関わっていくのか，というところまで考えて生きてゆきたいと思いました。(4年生M)

受講学生からの積極的な講評レポートのフィードバックによって講師として「講義」で伝えたかった事が，どのように受け止めてもらえたのかを確認することが出来た。また多くのヒントが与えられた。この講評レポートには，筆者はコメントを書いて返却した。こうして生産的な1サイクルのやり取りを進めることが出来た。大学教育の新しい可能性を見出すことが出来たように思われる。

6．結論　五感を活かし手で考える

急速な都市化の中で日本の子供たちは，自然と遊び仲間を失った。仲間と戸外で泥んこになって夢中に遊んだ経験，道草の経験，家事手伝いの生活経験もほとんどなくなってしまった。都市の情報空間と学校化社会では教科書に書かれた知識を記憶することに追われて，「ことば」で覚える以前にまず「経験」をする機会を失っている。このため遊んだ「場」の情景はぼんやりとしたままであり，明確な輪郭のある「原風景」にはならない。また日常生活では安全重視で他人との摩擦を出来るだけ回避しようとする。このため身を切られるような切実な「経験」，情念を打ち震わせる「経験」をすることもない。自己の存在を根底から問われる経験こそが「原体験」である。明確な「原風景」，「原体験」を思い浮かべることが出来ないことは，その人の思考の揺ぎ無き基盤が未形成であることを意味している。問題に直面した時に出てくる原因不明の不安感は，自らの存在の基盤となる「原体験」と「原風景」が，あいまいでぼんやりとしていることに起因していると考えられるのである。

6歳までの幼児期における運動刺激と知的刺激が，脳の発達に影響を与えるとされている。「ものを習うには適切な年齢というものがある。」，「時期を逃すと手遅れになる。」という経験原則も存在する。では都市化，学校化の中で自然を失い遊び仲間を失ったままに成長した日本の若い人々にとってその未来は，どうなるのであろうか。情報化社会とIT技術革命のマクロトレンドに絶望するのではなく，そこに新しい可能性が開かれていると考えるべきであろう。

それはまずこの自らの能力と生育した環境の問題点に気づくことである。小学生時代から等閑にされて未発達のままとなった手と頭と心をつなぐ回路の自己訓練による開発と身体感覚の回復に努力すればよいのである。

五感と直観を活かして身体感覚とともに経験したことを，素直に言葉（方言）で表現することから始める。その場で記録を作り，データとする。このオリジナル・データを蓄積，累積してさらに構造図解に展開する。続いてこの構造図解をベースに文章を作成して，「論理」を磨

いていく。情報洪水の中にあっては無意識のうちに「断片的情報」のインプットにばかり注意を払っている。自分で感じたことを素直に感情表出する。考えたことを「ことば」や「文章」で表現（アウトプット）する。こうした自己を表現する機会がなかったため，心は冷え込み，頭は働かず，手も錆付いて動かなくなってしまったのである。自分が五感，身体感覚をもって感じたことを手で頭にインプットする。その次に自分で考えたことを手で書いてアウトプットする。これを倦まず弛まず続けていく。こうすれば心と手と頭は次第に連動して動くようになり，違った現象の中に同一の本質を同定する「等価変換」思考力も回復させることが可能となる。

だが現代人はこうした手作業を非効率であるとして孤独な魂を一挙に広い世界（それは仮想現実）へ解放する衝動にかられることになる。これを助けるのがITスマートフォーンである。それはあたかも孫悟空の「如意棒」のように，「雲」に乗って宇宙の果てまで飛んでいくことを可能にしてくれる。そこで得られた「情報」をコピー・アンド・ペーストしてつなぎ合わせることにより自分が見たと思いこんでいる宇宙の姿を描くことも出来るであろう。しかしそれは自らの五感，直観，身体感覚を活かした「経験」によって確認したものではない。我々はこの具体，経験の世界に帰ってくるべき着地点を持たなければ永遠に「雲」に乗って漂い続けるしかないのである。経験をベースに思考する力がなければ，絶えずスマートフォーンで検索した情報が指示することに従うほかないのである。これはスーパー・コンピューター「雲」にコントロールされた人間ロボットというべき存在である。

我々は直立二足歩行のサルである。その存在は，地球をおおう命の連鎖の結び目の１つに過ぎない。このように考えることが出来れば，色も匂いもあるこの生きた世界における一度だけの人生を享受する道が開かれるであろう。

そのためにこそ，五感・直観を活かし手で考え続けるのである。

大学教育は，社会に流通する「情報量」に連動して知識の伝達に力点を置く傾向を強めている。学生はこれに対応して知識の「外在化」を加速させている。「情報検索力」が，「知的能力」であると誤解されて，知的能力の核心は「自分で考える力」である事が，忘れられている。

21世紀人類史の大転換期における巨大なうねりの中にあっては「価値を内面化」して「自分の尺度を持って生きるための知恵」こそが，重要である。

大学教育には，学生が自分の尺度を形成して「生きるための知恵」を身につける事を主眼とする再構築が必要とされている。

謝辞：北海道大学経済学部准教授岡田美弥子先生のイニシアティブによって今回10年ぶりに講義の機会が与えられたことに深く感謝します。外部から講師を招いての講義は，受け入れ担当教員の積極的な協力と支援がなければ成立しません。「読後感想文」の課題文の印刷，配布，回収さらには講義資料の印刷・配布，コメントの回収等には岡田先生をはじめとして多くの方々のご支援を頂きました。記して感謝の意を表します。また受講学生諸氏の積極的な参加とやり取りに感謝いたします。危機の中にある日本と世界の未来は，若い人々の手の中にあります。人は何を最も大事な価値とするかによってその生き方が変わってきます。１人１人の生き方の変化が，各自のおかれた現場から社会に揺らぎを与えてそれが大きな変化の震源になると考えています。皆さんの大いなる発展とご健闘を祈るばかりです。

2015.8.　米山　喜久治

参考文献

本田宗一郎（1986）『私の手が語る』講談社文庫。
――――――（1996）『俺の考え』新潮文庫。
――――――（2001）『本田宗一郎　夢を力に』日経ビジネス人文庫。
――――――（2005）『やりたいことをやれ』PHP研究所。
――――――（2014）『得手に帆をあげて』光文社。
伊丹敬之（2010）『本田宗一郎』ミネルヴァ書房。
NHK 取材班（1992）『技術と格闘した男』日本放送協会出版。
宝島社（2015）『本田宗一郎という生き方』別冊宝島 2311 号。